

お散歩 e本 ふしぎ編



もくじ

はじめに ~「ふしぎ」の種を見つけよう~	2
○ ハ人塚・喧嘩塚	3
○ 鶲鷦石	9
○ 海で拾ったお地蔵さん	13
○ お田戸さんの怪	15
○ 吹き上げの化粧地蔵	21
○ 伊良湖明神のおこり	23
○ 柳田國男と伊良湖岬	27
☆ 「ふしぎ文学半島」プロジェクト：		
ふしぎ発信基地としての図書館	31
☆ ふしぎ文学マスターから	33
○ ほいほいどり	37
○ 首なし地蔵さま	41
○ 久丸王と小塩津の寝まつり	47
○ 大力お姫さま	51
○ およしほうこん	54
○ 泉名月居所跡	57
○ 池ノ原公園	61
あとがき ~「ふしぎ」の花を咲かせよう~	66
コラム ... 4・12・18・22・25・26・29・35・39・42・45・53		

〈ティーンズ怪談学校〉

• 山の中の喧嘩塚	6
• あの子	19
• 父の昔物語	40
• みちゃだめ	48
• 狐の提灯	55
• 傷の話	58

はじめに ~「ふしぎ」の種を見つけよう~

町を歩いているとき、「ふしぎだな」と思ったことはありますか？

「ふしぎ」と言っても、色々あります。そもそも、私の「ふしぎ」と、あなたの「ふしぎ」は必ずしも同じとは限りません。

「なんで空は青いんだろう。ふしぎだね。」

と口に出した人がいたときに、あなたは

「そうだね、ふしぎだね。」

と思いますか。それとも、

「そんなの、ちっともふしぎじゃないよ。」

と思いますか。それでは、

「あのお地蔵さん、何回首をつけても首が落ちてしまうんだって。ふしぎだね。」
のときは、どうでしょうか。

「あの浜辺、人魂がでたんだって。ふしぎだね。」

のときは、どうでしょうか。

「なにか」が起きたときに、一旦立ち止まって考えて、その事柄を説明できるような筋道がみつけられなかったときに、人はその「なにか」を「ふしぎ」として受け取ります。でも、思いを巡らせた結果、その事柄を説明できるような道筋がみつけられたら、その「なにか」は、「ふしぎでも何でもないこと」になります。

大切なのは、「ふしぎ」か「ふしぎじゃないか」ではなく、この「なにか」、すなわち「ふしぎ」の“種”に気がつくことにあります。

我々の周りには、ふしぎの種がたくさん落ちています。

そして、このふしぎの種は今に至るまで、たくさん見つかってきました。

先に紹介した「何度も首をつないでも、落ちてしまうお地蔵さん」も、「浜辺に出る人魂」も、この田原で見つかった「ふしぎ」です。

この本には、田原の「ふしぎ」がたくさん詰まっています。

また、「ふしぎ」を見つけ、「ふしぎ」を残し、「ふしぎ」を愛した「ふしぎ」のエピソードたちもたくさん出てきます。

さあ、この本を携えて、一緒に「ふしぎ」を探すお散歩に出かけてみましょう。

八人塚・山伏塚

謎の病の原因は、亡魂たちの祟り？
一本の松にまつわる、不思議な物語。

<八人塚>

田原町大字大久保西山にあり、傍らに老松があった。慶応年間に長興寺建立の時、この木を伐り用材とした。ところが敷地組の大工棟梁を始め、木工木挽らのこれに関係した者は悉く病気にかかった。

これらの病人は異口同音に「吾等八人は古戦に討死したものでその後靈魂は、この古松に宿りしが今伐木されて行く処がない」とのうわごとを述べるので、村人は恐れて供養の石碑を建ててその靈をなぐさめた。すると、今までの病者は間もなく皆全快したということである。碑の正面には



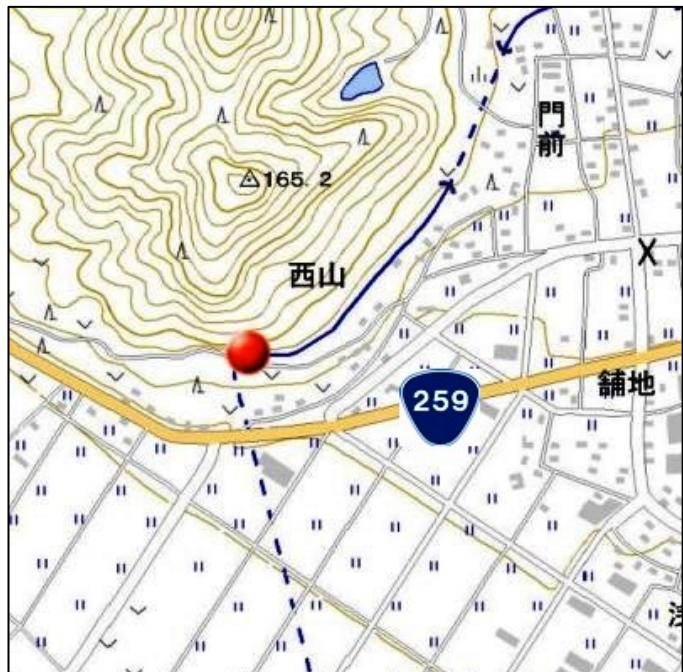
八人塚 此処從往古号八人塚々而已有之其故無知人也傍有古松一株伐成本山用木係之人々皆被惱疫鬼依而今辰設供養立石誌慰亡者者也。

とあり、左側に、当村敷地瀬古中。右側に、維時慶応二（一八六六）丙寅年正月とある。

<山伏塚（一名喧嘩塚）>

『田原城主考』四に詳細にあり、『山鹿語類』廿六巻の記事をあげ、家康公田原御狩の時、岡部八十郎と中川雅代八兵衛兩人御膳番として供奉した。その日鹿打鉄砲を先きに置いて、何れが先きに取るか走りくらべをした。岡部が早く走り着きこれを取ったが、中川も同時位であったから、岡部がそれを奪い取ったため、兩人喧嘩となり岡部中川を切る。

両人共脇差の討合いであったが、中川は羽織の紐にかかって抜きかねた、……その日の勢子対象井伊直政遙に之を見て馬を走らせてこれを引き分けた。……八兵衛の若党が八十郎の頸を切る。八兵衛も八十郎死する上は切腹するが至当とし切腹してた。死体は近藤石見守が取り納めしめた。『城主考』は、中神暮休の説として、両人を龍門寺と城宝寺に処置したという。旧説には、二ツ坂中道左右にありといい、又は斗争の地が柳沢であるというから、土人の口伝のように山伏塚として香華が献じられているが、これが両士の墳ではないか、柳沢なる時は二ツ坂では遠すぎると述べている。現在五軒町に二塚が並存し、昔から一塚のみに香華を供えると祟りがあり、必らず両塚に供え参ると伝えられている。



八人塚

田原市大久保町西山

【三河田原駅より車で約10分】

〈引用文献〉

- ・田原町史 下巻 田原町文化財保護審議会・田原町史編さん委員会編 1978 田原町・田原町教育委員会

< コラム > ティーンズ怪談学校とは

ティーンズ怪談学校とは、平成 23 年 7 月 31 日と翌平成 24 年 7 月 29 日に田原市図書館主催で開催された、中学生・高校生を対象に田原市の不思議な話を基として小説を書いてもらうというイベントである。小説家の悠崎仁先生に、小説の書き方について指導していただき、実際に作品を完成させ、発表し合うイベントで、平成 23 年開催の折には 6 名の参加があり 7 作品が、翌平成 24 年には 5 名の参加があり 5 作品が作成された。

いずれも地元である田原市にちなんだ作品を作るという事が前提となっており、そのため伝承されている民話・逸話などを作品作りの材料として図書館側が用意した。そのため、初年度は民話などを基にアレンジを加え新しい作品としている作品が多く見られた。基の民話・逸話が上手く活かされており、基となった話にも興味を持てる作品が多くかった。一方次年度では参加者が田原市の地名や学校などを舞台に自由な発想で作成された独自性の高い作品が多く見られ、実際にその土地でそんな逸話が伝えられているのかもしれないと想像させる作品が集まった。

中学生・高校生の若い世代は地域の伝承に触れる機会が少ない。ティーンズ怪談学校では参加した中学生・高校生からも地元で伝承されている話を学ぶ事ができたとの声があり、参加をきっかけに民話などに興味を持った子もいたようである。ティーンズ怪談学校は若い世代に地域の伝承を伝える良い機会となったのではないかと感じる。

ティーンズ怪談学校を通じて作成された作品はいずれも図書館発行の「みどりの翼増刊号」として冊子体にまとめ、図書館内にて配布を行っている。また、図書館 HP からも閲覧する事が可能である。

田原市図書館ホームページ 『ティーンズ怪談学校作品集』

<http://www.city.tahara.aichi.jp/section/library/info/tkg12.html>



<ティーンズ怪談学校> 山の中の喧嘩塚

えす・きとう（田原市在住 中学1年生）

田原市の五軒丁に喧嘩塚というふたつの塚があった。

なんでも、ふたつの塚のうち、片方だけに花や線香をお供えすると祟りがあるから、かならず、ふたつの塚に同じように花や線香をお供えをしなくてはならないと伝えられてきた。

僕は、伝説や迷信を信じていたから、こういうお話には興味があった。

ある日、友達のY君と一緒に下校をしていたら、Y君が突然、「田原に喧嘩塚という変な言い伝えがある塚があるんだけど、今度、父さんが仕事で田原に行く時、一緒に行ってみん？」

と言った。

もちろん、僕は行ってみたかったけど、こう言った。

「でも、それって、もうだいぶ昔になくなってしまった塚じゃん」

しかし、Y君は、自信を持って、

「それを探すために行くんだよ」

と言った。

すると、横からK君が入ってきて、

「お前ら、喧嘩塚行くの？」

と言った。

なぜ、K君も知っているのか、と訊いたところ、K君も半年前ぐらいに田原に行って探したことがあるからだそうだ。結局、塚は見つからなかったという。

「お前ら行くんだったら、オレも行くわ」

とK君は言った。

しかたがないので、僕は、しぶしぶ賛成した。

ついに行く日が来て、僕はY君のお父さんの車に乗り込んだ。

昨夜は、緊張してまったく寝れなかつたので、僕は、車に乗ったら、スグに寝てしまった。

二時間くらい経つんだろうか。僕は、K君の声に起こされた。

目を開けると、車が山道をズレて、巨大な木にギキツツしていた。

Y君のお父さんは、本当なら仕事場に着いていなければならない時間だ。

どうしてこうなったのか、とK君に訊くと、K君は、
「Y君のお父さんが仕事に遅れそうだから、たぶん誰も知らない山道に来たら、目の前にシカの群れが飛び出してきて、よけたら、道をそれでこうなった」
と言った。

Y君のお父さんは、この山を越えれば町へ出られるはずだ、と言った。
僕は、
「じゃあ、今、車が来た道を戻れば山道に出られるでしょ」
と言った。

しかし、車が来た道は、みんなが探してもどこにもない。だんだんと日が落ちてきた。

するとY君のお父さんが、
「よし、とにかく下りてみよう」
と言った。

みんなあまり賛成ではなかったが、助かるのはそれしかないと思って、Y君のお父さんについていった。

だが、どんなに歩いても山のふもとにつかない。もう辺りは真っ暗だ。
Y君のお父さんは、
「もう少しだけ歩いてみよう」
と言った。

しかし、その瞬間、雨が降り始めた。
僕たちは、走った。
すると、だいぶ近くに小さな小屋があった。僕たちは、そこで一休みすることにした。

すると、突然、小屋の奥から物音が聞こえた。
僕たちは、そちらへおそるおそる行ってみた。
すると、そこには、ふたつの塚があった。

音は、その塚から聞こえてくるようだ。
僕たちは、これが喧嘩塚だ、と思ったから両方の塚に花を供えた。
しかし、Y君のお父さんは、片方の塚にしか花を供えなかつた。
だが、小屋の中は暗くて、Y君のお父さんが片方にしか供えなかつたのは、誰にもわからなかつた。

次の日の朝、小屋の中で寝ていた僕たちは、起きてみると、Y君のお父さんがいなくなっているのに気がついた。

もしかすると・・・。

僕たちは、塚に供えてある花の数をかぞえた。

片方は8本、もう一方は、7本しかない。

Y君のお父さんだけ片方にしか入れていないのだ。

僕たちは、全力でお父さんを探した。

すると、Y君の叫び声が聞こえた。

僕は、そちらへ向かったが、途中で石につまずいてしまった。

僕は、倒れたままだった。

目を開けると、家の自分の部屋に寝ていた。

あれは、夢だったんだろうか。

僕は、Y君の家に電話をかけた。

Y君に夢の話をすると、Y君も同じ夢を見たという。

お父さんは、大丈夫か、と訊くと、朝から仕事でいないと言った。

しかし、Y君のお父さんは、ずっと帰ってこなかった・・・。



鸚鵡石（おうむせき）

あらゆる音を響かせる岩が、
唯一返せない「笛の音」に秘められた、悲しい恋の物語。

今から約千二百年ほど前の、天平年間のことです。

ある日、表浜の越戸の海岸に、小舟が一そうよりつきました。年ごろ二十八、九才の異国の人があつていました。位の高い人に見えました。泉福寺の自聖和尚さんが、自分の寺につれ帰って、お世話をしていました。天平十五年、泉福寺の本堂の、四間四面のふしんをこの男がいたしました。この男は、異国の王様の三男とわかり、流れついたが二十八才であったので、泉福寺に二十八部像を記念にまつりました。この男は、渥美太夫重国と名のり、伊川津の般若寺の近くに住むことになりました。まもなく郡司になりました。この辺が渥美太夫重国が治めた土地であるので、渥美郡の名が起ったといわれます。

渥美太夫重国は、天平十七年三月、高根山（越戸の大山）の猪狩の見物に行きました。夕暮れ谷間に、十七、八才の美しい娘が、桜の枝を、折っているのにあいました。人里はなれたところで、年若い娘一人でいるのは、不思議に思い、重国は馬からおりて、尋ねました、「母と二人暮しでしたが、その母が病死して、明日はその命日であるので、この桜の枝をとっているのです」と申しました。重国は屋敷につれ帰り、召使いにいたしました。その後、この娘を妻に迎え、名を八重寿と改め、泉福寺にお願をかけて、天平二十年八月、玉のような女の子が生れ、玉栄と名付けました。

ある日重国の留守に村松喜兵工という賊が来て、金を取って帰ろうとしました。八重寿は、天に向かって何か祈りますと、一天がにわかに、かきくもり、喜兵工の頭の上に雷が落ちました。重国が帰りますと、玄関に大男がたおれており、台所に大蛇がわになって、ねていましたので、大声をあげますと、八重寿は、あわててもとの姿になって、「私は高根山にすむ大蛇であります。いろいろお世話になりました。今日をかぎりに、おいとまをいただきます。」横笛を玉栄に、片身にのこして、亀山村の豊島ヶ池の主になりました。

そのうちに、玉栄は十七歳になり、主馬助と結婚するようになりましたが、母は大蛇であることがわかり、結婚はことわられました。

ある雨の降る日の夕方、鸚鵡石の上にあがって、母の片身の笛を取り出し、一曲

吹き終わって、のどをついて一生をとげました。このことがあってからこの岩には、玉栄の靈魂がとどまってか、岩に向って歌をうたえば、岩の中から歌い返すように返されつづけて来ます。笛の音は返って来ません。誰いふとなしにこの岩を鸚鵡石といい、後の世に越後国の和尚さんが、玉栄の碑を岩の上に立てました。誰が描いたのか、鸚鵡石の正面には油絵の玉栄の肖像が描いてあります。（注・現在はありません）学校から遠足によく行きました。鸚鵡石の由来を、芝居で見たのも遠い昔になりました。鸚鵡石の上には、越後の国の義導和尚さんの玉栄の詩を、碑に刻み建ててあります。

朽林頑石虎狼丘

時值道生皆點頭

我語非情人勿笑

即今故約永年儔

癸亥仲冬十日

早起觀鸚鵡石

少康禪師の往事を思い出て

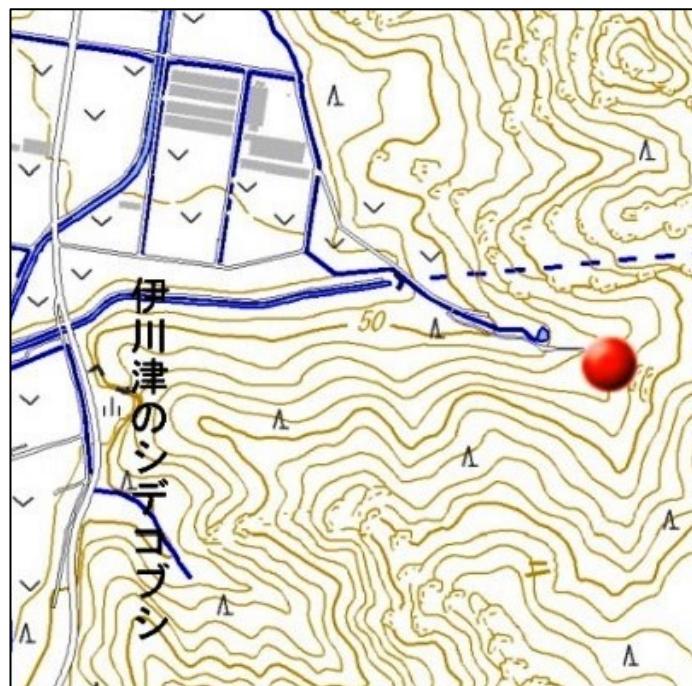
（少康禪師　中国の名僧、子供に金を与えて念佛させた僧。）

我真似に念佛申せよ鸚鵡石

不思議案 帰牛

※鸚鵡石の由来にはいろいろな説があるが
そのうちの一つをここにかかげる。





鸚鵡石

田原市伊川津町

【三河田原駅より車で約30分】

・
〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会

おうむ石

大羽 康利（渥美自然の会）

「鸚鵡石」は現在の案内板には「母を大蛇に持つ娘・玉栄が許嫁の心変わりを恨んで、母の形見の横笛を抱いて身投げした」と、簡単に紹介されているのみです。元々の伝説は「父・渥美重国は朝鮮半島の王子」で「越戸の海岸に漂着」、「泉福寺を普請（天平15年）」、「重国と母・八重寿は高根山（越戸大山）で出会った」、玉栄の碑母は大蛇で、「正体がばれるきっかけとなつた盗賊の名は伊川津喜兵衛」、「八重寿は豊島ヶ池（亀山町）の主となつた」と、渥美半島西部を股にかけたスケールの大きな伝説でした。岩の上には越後の国の義導和尚が建てた「玉栄の碑」があるほどです。

明治の頃、豊橋から牛車に揺られてはるばるやって来て、岩の前で三味線を弾き、酒盛りをした、との話も残っています。

ところでこの「おうむ石」は地学的には「秩父古生層のチャートからなっている断層鏡肌」です。断層が生じる際に、大きな摩擦によって硬い岩石の表面がつるつるになったものなのです。崖面に左上から右下にかけて擦痕がありますが、これが断層によって生じた摩擦を物語っています。チャートは珪酸からできており、非常に硬いものです。放散虫などの化石が見つかっており、生物起源であることも分かっているそうです。



擦痕のある鸚鵡石

参考資料：渥美町教育委員会編「鸚鵡石の由来」、池田芳雄著「大地は語る」

海で拾ったお地蔵さん

何度も捨てても帰ってくる！？ 光る地蔵の物語。

古田村に文昨と呼ぶ若者がいました。漁師でした。或日何時もの様に漁に出ましたが、その日に限ってざこ一疋もとれません。いら立ち乍ら海上をさまよううち海の中に「ピカッ」と、光が見えました。「しめた！」と心はずませ一網入れて引上げてみると魚ではなくお地蔵様が入っていました。

「えーい」縁起でもないものがと海に投込みました。しばらく舟を進めた処で網を入れ引上げて見ると矢張り魚の姿はなく同じお地蔵様が上って来ました。すっかり慌てた文昨は又海に投みました。気味が悪くなつてあきらめて帰ろうかと思ったがせめてもう一度だけと、今度は向もかえ遙かに遠い所で網を入れました。「どうぞ魚がとれますように」と心に念じながら網を引上げて見ると何とまあ又亦同じお地蔵様が而も光を放つて上つて来たではありませんか、すっかり顔色変えてふるえ出した文昨「三度までも同じ網に入つてお上りなつたお地蔵さま、よくよく御縁があり世の救いのためにお出ましのことかも知れない」と思い、早速檀那寺真如寺の住職様に申上げました。時の職第四世単誉上人は「大慈大悲の地蔵尊が特に正直なお前を頼つて世におでましになつた事故人のため心をこめておまつりしなさい」とすすめられ小さい堂を建て仏門に入つて終生御供養につとめたのでした。これが海蔵院の由来であり、それ以来子育延命地蔵尊として一般の人々からの尊信を集め一心に願う者は必ず大慈大悲の恵を与え、身体健全、転災授福の仏として参詣者も多く、特に二月と八月の二十四日は参拝祈願の人が多いと言われています。



(古田海蔵院の由来より)





海藏院真如寺

田原市古田町郷中

【三河田原駅より車で約30分】

〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会

お田戸さんの怪

ふしぎな話は数知れず…

蛇が怒りに狂うとき、人に災いを呼び起こす。

軍国調のはなやかであった、大正から昭和にかけて当時福江町大字中山字北郷通称小中山の田戸神社の側にあった陸試砲場には、地元からも従業員としてたくさん採用され、日一日と活気を帶びていたようです。はては田戸神社も迷惑な存在すら考えられて来ました。その現れとして境内の一部を射場敷地とし施設を設ける計画で、近くに作業小屋を建て準備をすすめようとした。真夜中のこと、その作業小屋は「めりめり」と締めつけられる感じと共に大地震かと思われる程のひどいゆれに当直の職員は生きた心地もありませんでした。夜があけて表へ出て見ても別段変わった様子もありません。同僚に恐ろしかった昨夜の話をしても、「寝ぼけたな、夢にうなされたんだろう」と、とり合はない者もあり、或者はまゆをひそめるものもありました。次の夜が訪れました。丑満時と思はわれる頃、亦しても締めつけられる物音と、ぐらぐら大地震に出会ったかと思われる大ゆれ、「只事でない、夢ではない」と当直員は青くなりました。夜の明けるを待ちかねて上司に申出ました。この話を聞いた地元の人達は「それはお田戸さんのお使い、大蛇のなす業だ、恐ろしい事だ境内を荒らしてはならない」と言い、遂にその計画は中止され模様がえとなつたと言われます。

又、広い射場の域内には運搬用にトロッコ線が敷設



されていました。或日従業員が三人グループとなり、トロッコを走らせていましたところが前方のレールを蛇が横切ろうとしているのが見えました。三人はブレーキをかけず、スピードを増して遂にその蛇を轢き殺しました。

胴体二つに切れた蛇、見るも無惨でした。然し其の後何日もたたぬ中に次ぎ次ぎとその三人は名も知れぬ病でなくなりました。誰言うとなく蛇の祟りだ、お田戸さんのお怒りだと噂が流れました。それから後どんな小さな蛇でも決して殺す者はなくなりました。

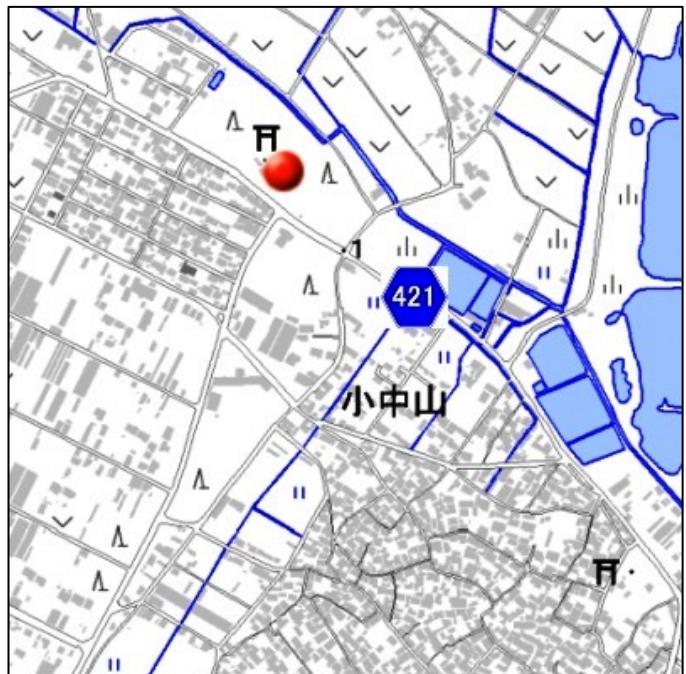
更に亦お社の後方から西の浜にかけ巾二間ほどで、長々と続く湿地帯があり、丈の低い雑草が生い茂り、恐らく飛行機の上からは緑のジュウタンが帶の様に見えるでしょう。

村の人はこれを「お通り道」と呼んで決して此処の草を刈りません。何でもお田戸さんと篠島の間を大蛇が往復するその道だと伝えられています。

或人はこんな話もしました。或将校があやまって蛇を殺しました。しばらくたった日、家から可愛い娘が病気になったと、知らせがありました。たまたま休暇が得られましたので家に帰り、娘の枕辺に行きました。娘は大声あげて叫びました。「こわい！蛇が」と、お父さんが娘には蛇に見えたのです。「ハッ」と思った将校は早速射場へ帰り、田戸神社にお詣りしてお詫びしたと伝えられています。其後娘さんの病気がどうなったか聞いていません。未だ未だお田戸さんには不思議な話が沢山あるようです。境内の木を切ってはならない。松葉も神主以外手をかけてはならぬ等々きりのない程あげられると言います。

(小中山区民より)





田戸神社

田原市小中山町西山

【国道 259 号を伊良湖岬方面へ
「保美」信号を右折しづばらく
直進

(三河田原駅より車で約 40 分)】

〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会

いぼのなる神様

～田戸神社のおはなし～

小中山 川口務（前 田戸神社宮司）

お爺さんやお婆さんが小さかった頃、足の脛や手の甲などにいぼが出来てきて、痛くも痒くもないのだけれど他人様に嫌がられたもので、お医者様にいっても、薬をつけてもさっぱり効き目がなかったが、お田戸さまのお石で撫でると綺麗に落ちるという評判が近在に流れ、やがて皮膚病に靈験あらたかな神様との評判がたかまり、カッパブックスの中で日本で唯一皮膚病の治る神様と紹介されると全国からアトピー性皮膚炎で苦しんでおられた親御さん方からの信心が寄せられた。

陸軍の試砲場のあった頃はこの危険な要地の守り神として立ち入り禁止区域内で厳然とその勤めを果たし、命がけで出掛けた戦場の兵士達からはお田戸さまのお陰でこんなして命拾いが出来たといった不思議なお話が沢山土産話として伝えられた。

渥美半島の先端部分は天竜水域から運ばれた土砂が堆積した長さ十キロ幅二キロの広大な砂丘地で、古墳群があり、古い製塩遺跡があり、縄文土器が掘り出されており、田戸貝塚は町史にものっているなど、古い歴史が刻まれて来た土地である。そこには三河黒松が防風林として生い茂り、きのこ取りに入った土地の人が何人か迷い込んでいる程深い。地下には頑丈な岩盤が敷き詰められており、広大な松林に降った多量の雨は砂礫層を潜って濾過され、岩盤のタンクに貯蔵され、今でも地名にも残っている、きれいなおいしい「清水」となって村人達に大事にされてきた。

お田戸さまー「田戸神社」はその西山原生林の北端部に小さなお社に収まっておられ、白い蝮が「お使い者」としてお仕えしてきた。古い神様の御祭神面足命のお名前を知らない人はたくさん居るが白い蝮が「お使い者」であることを知らない人はいない。

森の枝を下しただけでも障り受けて手が不自由になるし、ごをかいて来て燃せば火事になると、この神様に対しての畏敬の念は小中山の村人ばかりか、近在からもっと遠くまでも聞こえていてお参りの方が絶えないでいる。



<ティーンズ怪談学校> あの子

河合（田原市在住 高校2年生）

わたしの住んでいる八王子町では、毎年、夏休みに子供会主催の花火大会がある。花火大会といっても、PTAの人が配ってくれる手持ち花火や各自準備してきたものをみんなでやるといった、ちいさなイベントだ。

薄明るかった空が、いつの間にか暗くなり、持ってきた花火も残りわずかになってしまった頃。

「ねえ。ヒマだし、『きもだめし』やろ」と、ある中学生の男子が言った。

わたしは、その時、小学3年生で、人より臆病だったが、去年もやってたし、今年は、行ってみよう、と思い、少し怖いと思う気持ちもあったが、行くことにした。

ルールは、鳥居をくぐってお宮さんに行き、お宮さんの横を通って林を抜け、最後にお墓を回ってゴール、といったものだった。

途中に『おどかし役』もいないので、怖い方が好きな人にはスリルが足りないかもしれませんのが、怖がりのわたしには、充分だった。

先頭を中学生男子が歩き、その後ろに数人が続いた。

鳥居をくぐると、そこから一気に気温が下がったような気がした。

振り返ると、木々に囲まれた真っ暗な中、鳥居の外だけが明るく浮き出て見えた。予想以上の暗さに引きかえしたくなつたが、懐中電灯はひとつだけだったので、隣の人の服をつかみ、我慢して連れて行った。

少し進むと、お宮さんが見えた。

そこだけ木に囲まれておらず、月明かりに照らされてくっきりと形がわかつた。

が、幼いわたしが注目したのは、そこではなかつた。

明るく照らし出されたそこには、ちいさな女の子が座つていた。

見たこともない知らない子だった。

黒いワンピースに、黒く長い髪、黒い肌に黒い顔。

なんであんなに明るいのに顔が見えないの。

そう思った瞬間に、その顔らしき場所がぐるりと回つて、こちらに向かけた。

途端、誰かが、

「オバケだ！！」

と、叫んだ。

同時に、我に帰り、どんどん恐怖がこみ上げてきた。

気づくと啼きながら、声を上げて走っていた。

その声に反応し、周りもわっと逃げ帰る。

途中でつまずき、転んだが、痛みなど気にせずにただただ走った。

みんなが鳥居を抜けると、真っ青な顔をしたわたしたちを見て、大人たちは、ひどく驚いたようだった。

その日、もう一度見に行こう、という人は誰一人いなかった。

次の日、そのちいさな女の子の話をすると、

「そんなの見てないよ。誰かが『オバケだ！！』って叫んだから怖くなって逃げた」と、みんな口をそろえて言うのだった。

そこで、

「じゃ、その叫んだ人って誰だったの」

と訊くと、

「お前じゃないの」

「あたしじゃないよ、アンタでしょ」

「ちがうちがう」

などと言った軽いロゲンカがはじまってしまい、結局、誰が叫んだのかはわからずじまいだった。

家族にもその話をしてみたところ、

「戦争で亡くなった子供かな。それか、捨てられた人形の幽霊かもね。あそこいろいろ捨てられるから」

という結果になった。

結局、あの子が何者だったのか、叫んだのは誰だったのかは、今でもわからない。

けれど、この季節が来ると、どうしても思い出さずにはいられない。

それくらい鮮明にあの光景が目に焼きついている。

「あの子は、まだ、あの場所にひとりで座っているのかな」

そう思うと、なぜか、彼女を寂しく思うようになった。

吹き上げの化粧地蔵

若侍が刀を下ろすとき、
ふしぎな美女の正体が明らかに…？！

田原町大字野田字地蔵の地で、戦国時代毎夜の如く化粧した妙齡の美人がこの地に現れるので、或る夜、血氣の若武者が一刀両断して帰った。

翌日行ってみると、それはお地蔵さんで、首が落ちていた。それから、誰いうとなく「化粧地蔵」又は「首切地蔵」というようになった。この地蔵は現在では、野田字尾ヶ坂西の放光院に祭祀されているがこの頃では忘れられつつある。



野田山法光院

田原市野田町尾ヶ坂西

【三河田原駅より車で約20分 サンテパルクより5分】

〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会

〈コラム〉化粧地蔵の諸説と真相

野田町の「化粧地蔵」には、他にもいくつかの異名があります。「首切り地蔵」「化け地蔵」「身代わり地蔵」などです。どうしていくつもの異名があるのか？それは伝説自体に様々なバリエーションがあることと関係しているようです。

まずは「斬られたのは人間だった」説。

「化粧地蔵」。こちらは事件の後、辺りに化粧をした娘が現れたことから来た呼び名のようです。これは娘の亡霊、ということになるのでしょうか。しかしそれでは娘の遺体が無かったことの説明がつきません。

そして「斬られたのは人間ではなかった」説。

「身代わり地蔵」。「身代わり」ということは斬りかかられた人間の娘の代わりにお地蔵様の首が斬られたことになります。遺体は無かった。つまり娘は生きている。しかし「娘が生き延びた」という話は伝わっていない。生きていることが明らかになってはまずい事情があったのでしょうか。

次に「化け地蔵」。地蔵自体が「おばけ」「化けもの」だったという説です。路傍に置かれたお地蔵様には不成仏霊が憑くことがある、などという話があります。若武者が斬ったのはこの「不成仏霊」だったのではないか。他の説では、化粧した妙齢の美人に若武者が斬りかかる、というのが少しありににくいのですが、この説をとれば「若武者の化け物退治」ということで納得はいきます。しかし本当に「おばけ」が現れたのでしょうか。

さて、真相はどこにあるのか。それはわかりません。わからないからこそ「ふしぎ」なのです。「ふしぎ」な話には命に関するものが多くあります。私たちが未だ「生命」について知らないことが少なくない、ということの証明なのかもしれません。娘の供養のために当時の村人たちは観音菩薩の石仏を造り、お地蔵様と一緒に祀りしています。石仏の裏には元禄9年、と刻印されていますので、今から三百年以上昔のことになります。この時代の人々も「命のふしぎ」に畏敬の念を抱いていた、と言えるのではないでしょうか。

取材協力 野田山法光院住職 片岡博雄師

伊良湖明神の起り

狐か、狸か、モノノケか。
童子に憑いた、その正体は？

今からおよそ八百七十年前の嘉承元年正月、伊良湖村が海に近い宮山の北が麓にあつた頃のことです。

ある日村の童子が突然もののがついたようにこんなことを口ばしりました。
「我は伊勢神宮なり、ゆめゆめ我のいうことを侮るなかれ、この地伊良湖が嶋は我國の偏境なりといえども伊勢の地に近く、神風吹きめぐり、白波寄する波降なる山海なり、この山の麓に我の分身を祀る宮居を移し大明神を崇めるべし、また我伊勢の社を拝することの叶はざる者もこの神を敬えば漁獵の願い大いに叶うなり、尚また舟船の難守るなり。」

こう言い終わるとこの童子はもんぜつし倒れてしまいました。人々は驚きあわて手当をしてやるとようよみがえりましたが、すでにもののは体から去っておりました。

あまりにも不思議なことに村人たちは早速このことを伊勢神宮に告げ、神宮の許を得て宮山の中腹に社を設け、伊良湖大明神と崇め奉るようになりました。



そうして二十年ごとの遷宮はもちろん四月の御衣（おんぞ）、五月の流鏑馬（やぶさめ-馬に乗って走りながらかぶり矢での的をいること）、師走の年越に至るまでの毎年の神事も伊勢神宮をそのままに移しました。

今宮山原生林の南の谷を宮川、あるいは御裳すそ川と呼んでいるのもこの名残りであります。

その後東海道を下り、二川より奥郡道にはいった伊勢参宮の旅人たちはうず潮逆まく伊良湖渡会の急流を眺め、伊勢に渡るを恐れ、この社に詣で帰路についた者も少くなかったということです。

明治三十九年三月試砲場設置のため、全村現在地に移転し、いまでは静まりかえった原生林の中で、宮居跡だけがその名残りとなっています。

(広報あつみ)



伊良湖神社

田原市日出町骨山

【三河田原駅より車で約45分】

〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会

＜コラム＞ 糟谷磯丸と伊良湖（明神）神社

糟谷磯丸は、江戸時代の明和元(1764)年5月3日に現在の伊良湖町で漁師の家の長男として生まれました。当時の伊良湖村は貧しく、そのうえ31歳で父を亡くし、母は長い間病気でした。親孝行の磯丸は、母の病気が治るように3年間近くの伊良湖神社（当時は伊良湖明神）に毎日お参りし、そのかいあってやがて母の病気は良くなりました。

磯丸が和歌に興味を持ったのはちょうどこの頃で、伊良湖神社にお参りする旅人たちが歌を口ずさむのを聞き、その短い言葉の中に不思議な魅力を感じたためでした。

磯丸は、もともと漁師で文字を書くことも歌をつくることもできませんでしたが努力して歌を作るようになりました。「明神の石の斜段で眺むれば沖で漁師が船をこぎます」この歌は、歌を詠み始めた頃の磯丸の作品と言われています。そんな磯丸を生涯にわたり支援したのは現在の亀山町に住んでいた大垣新田藩の役人井本常蔭です。この常蔭から文字や和歌の教えを受け「磯丸」という名前ももらいました。その後、吉田（現在の豊橋市）の女性の歌人林織江が伊良湖へ旅をしたときに磯丸が世話をしたのがきっかけとなり、織江の先生であった京都の芝山大納言持豊の弟子になり「貞良」の名前をもらい、ますます歌がうまくなっていました。

磯丸は、一生のうちに数万首の歌を詠んだとされています。中でも「まじない歌」は、当時の人々の暮らし向きや磯丸の人柄がよく表れています。磯丸に歌を詠んでもらい、その歌を石碑にしたり、掛軸にして床の間に掛けると不思議とその願いがかなったのです。このことを磯丸は、自らの力ではなく日頃から信心していた明神様の力であるとしていました。

老若男女、身分、貧富を越えて、多くの人々に愛された磯丸は、嘉永元(1848)年、生まれた日と同じ5月3日に85歳で伊良湖で亡くなりました。磯丸を慕う人々は神様としてお祀りすることを願い出、それが許され「磯丸靈神」の名前をもらいました。神様となった磯丸のために伊良湖の人たちは「磯丸靈神の祠」をつくりました。この祠は、現在、伊良湖神社境内に「糟谷磯丸旧里」の石碑とともにあります。



< コラム > 地域

原始から渥美半島は東西の文化、経済の交流地点であった。それは渥美半島が太平洋に面していることから、海を介した交通が今より盛んであった時代において、大変有利な地理的な環境であったことによるのである。かつては、古墳時代から古代までの盛んに作られた塩は、税として伊勢湾を渡り奈良の都に収められたし、都では伊良湖は歌枕の地として憧れの場所でもあった。都の人にとって渥美半島は今より身近なものだったのである。その背景には、半島の対岸にある伊勢神宮の宗教はもとより・文化・経済に大きな影響力を持った神社があったことが大きく影響していた。

中世の記録には、渥美半島には神戸町周辺の本神戸を中心に伊勢神宮の御廬、御厨が10箇所分布する。渥美半島は特にその数が多いことから、伊勢神宮の有力な経済基盤となっていた。神宮の禱官たちの私的開発も盛んに行われ、その開発のひとつが平安時代の終りから鎌倉時代に盛んだった焼き物づくりだったのである。

渥美半島に春の訪れを告げる伊良湖神社の御衣祭りは、伊良湖神社創設（貞觀17年・875）のきっかけとなったものである。伊良湖神社から御衣を送る神事は途絶えてしまったが、明治34年に龜山町の御糸御料所でつくられた「お糸」が伊勢神宮に奉納され、「お糸船」として渥美半島と伊勢神宮の密接なつながりを今に伝えている。



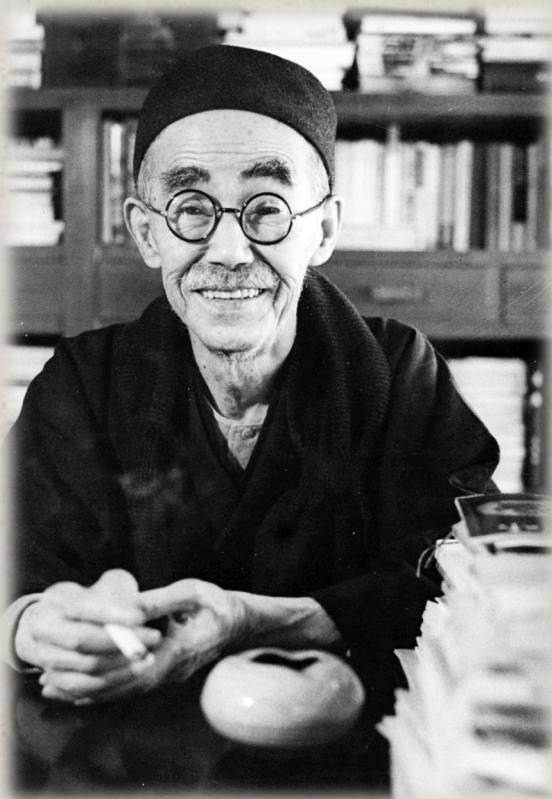
柳田國男と伊良湖岬

流れ着いた椰子が問いかける、日本人の「故郷」。
日本民俗学の泰斗が見た、伊良湖岬。

柳田（当時は松岡姓）國男が伊良湖を訪れたのは明治 31（1898）年のことです。同時期に訪れた自然主義文学者として著名な田山花袋の「伊良湖半島」によれば、実際の滞在は 7 月 12 日から 9 月 4 日までの約 2 ヶ月間とされています。この時國男は 23 歳、政治学を志す東京帝国大学の学生で、その逗留先は伊良湖の網元小久保惣三郎の離れでした。

柳田國男を伊良湖へ誘ったのは、地元畠村（現在の福江町）出身の挿絵画家宮川春汀で、柳田をはじめ花袋や国木田独歩、島崎藤村らとの交流がありました。春汀は、盛んに故郷渥美半島のことを彼らに話したと思われ、もしもこの人との交流がなかったら恐らく柳田や花袋も伊良湖を訪れるることはなかったでしょう。柳田が滞在した当時の伊良湖集落は、現在の集落の場所とは異なります。半島の先端部、西ノ浜から伊良湖にかけて建設された陸軍伊良湖射場によって明治 39 年に移転をする前の伊良湖集落に柳田は滞在したのです。当時の伊良湖集落は、現在の伊良湖シーパーク & スパのあたりにあり、その前庭あたりがちょうど小久保惣三郎宅で、現在その付近に「柳田國男逗留の地碑」が建てられています。この滞在中、同じ新体詩の仲間であった太田玉茗が 8 月 14 日に伊良湖を訪れています。そして玉茗が去った 8 月 28 日には田山花袋が伊良湖を訪れ、9 月 4 日柳田とともに福江港から汽船で知多の亀崎に向かっています。

柳田は、伊良湖滞在の 4 年後の明治 35 年にこの時のことを「伊勢の海」（後に「遊



写真協力・福崎町立柳田國男・松岡家記念館

海島記」と改題)と題して雑誌「太陽」に発表します。この書こそ後に日本民俗学の父と呼ばれる柳田民俗学の初発とされています。

柳田國男といえば、島崎藤村の「椰子の実」作詩のきっかけをつくった人として有名ですが、自身も恋路ヶ浜に流れ寄った椰子の実をもとに、日本人が黒潮に乗つて南から渡来したのではないかという壮大な仮説を晩年の著書『海上の道』で打ち立てています。伊良湖滞在記ともいえる「遊海島記」は、若き柳田が伊良湖や渥美で見聞した様々な事柄を記録しています。皆さんも一度読んでみてはいかがですか。



柳田國男逗留之地

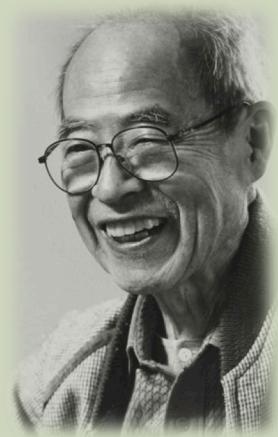
田原市伊良湖町

【豊鉄バス「伊良湖シーパーク&スパ前」バス停下車すぐ
三河田原駅より車で約40分】

〈コラム〉杉浦明平と柳田國男

わたしの幼いころは、屋敷を取り巻く板垣の外は、異様な他界だった。田畠のあちこちにどぶ川、沼や小さな池、竹藪やら松林やら雑木林、おまけに墓地までが雑然と入り乱れていて、そこは異様な物の怪が飛びまわる世界が、深く深く裏山までつながっているらしかった。もちろんわたしたちは、夜間、裏木戸の外に一回も出たことはないし、木戸を開けて外を覗き見ることさえこわかった。まして雨のしづか降る夜ともなれば、山の麓を狐の嫁入り行列が連なってゆき、墓の近くからの藪からは若い女の幽霊がどろどろと怨めしげに現れるということだった。

草の花が咲く-『偽「最後の晩餐」』



杉浦明平は、1931年渥美郡福江町（現在の田原市折立町）に生まれた作家・文芸評論家・エッセイストである。東京帝国大学卒業後、翻訳や編集の仕事に携わっていたが、第二次世界大戦中郷里に戻り、執筆活動や政治活動に尽力する。郷土にゆかりある渡辺華山を材に取った『小説渡辺華山』では、1971年毎日出版文化賞を受賞した。杉浦の著作を読むと、しばしば「柳田國男（国男）」の名前が出てくる。故郷ゆかりの「椰子の実」の逸話を語る際に登場することもあるが、とりわけ特筆すべきは『文学』に寄せたこの一文だろう。

柳田国男の本から学ぶことのできぬ日本人ということは考えることができない。

『木綿以前の事』のおどろき-『文学』（1961年1月）

杉浦は、柳田が民俗資料の蒐集に心血を注いだ足跡に、大きな意義を見出した。とりわけ、戦後急速に近代化が進む中で、「奥郡」と呼ばれた渥美的生活におけるさまざまな変化を目の当たりにし、以下のように述べている。

（略）わたしは中世や明治、大正や昭和初年をなつかしがっているのではない。過去とくらべれば今はけっしてわるい時代ではない。ただ、明治、大正、昭和初年はあわただしい過渡期であったとしても、将来に何一つ伝えるべきものをもたなかつ

たのであろうか。もし伝えるに足る資料があったら、至急それらを記録しておくべきではないだろうかと考えるのである。そういう資料を蒐集し総合するのは、第二の柳田国男の出現まで待ってもよい。ともかく、とりあえず、材料だけは記録しておかねばならぬ。

遊びにも大きな変化-『渥美の四季』

杉浦の業績を辿る上で欠かすことのできない「記録文学」と「エッセイ」。手法こそ民俗学者とは異なるものの、彼は確かに、「時代」を「記録」することに情熱を注いだ。民俗学の泰斗の背中を、杉浦も確かに見ていたのだ。

余談ではあるが、柳田が多くの「ふしぎ」を記録したように、杉浦もまた、彼の生きた時代の「ふしぎ」を幾つか記録している。たとえば、『ボラの哄笑』（河出書房新社）に収録される、「噂の幽霊屋敷」「もう一つの怪談」「怪談の訂正と後日談」では、渥美における「怪談」と、その伝播の様子が、ユーモアを交えながら克明に記されている。



ふしぎ半島プロジェクト： ふしぎ発信基地としての図書館

幕末の先覚者、渡辺華山は田原藩（現在の愛知県田原市内）の家老でした。1839年に幕府の弾圧を受けて職を解かれた華山がその晩年を過ごした場所は田原城下、池ノ原です。1934年、同じ池ノ原で泉名月（いすみ なつき）は生まれました。名月は『高野聖』『天守物語』などの幻想的な作品が知られる文豪・泉鏡花の姪でしたが、鏡花の没後、望まれて、すず夫人の養女となりました。童話や鏡花にまつわる隨筆を著す一方で、その原稿や遺品を守り、2008年に亡くなるまで鏡花文学の普及に尽力されたのです。

このたび田原市は、泉名月の遺品の一部を遺族からご寄付いただき、図書館で活用することにしました。それが、2012年11月に田原市中央図書館の2階にオープンした新コーナー、「泉名月記念ふしぎ図書館」です。

「ふしぎ図書館」は、泉名月の業績を顕彰すると同時に、泉鏡花や、彼と親しかった偉大な民俗学者、柳田國男（大変な怪談好きだったそうです）にちなみ、幻想文学の魅力を多くの人に知っていただくためのコレクションです。柳田といえば、若い頃、今は田原市の一帯となった伊良湖に滞在し、南の島から海岸に流れ着いた椰子の実を拾ったエピソードが有名です。このエピソードが、柳田の代表作のひとつ『海上の道』や、島崎藤村の「椰子の実」の歌につながっていきます。田原市図書館は、2011年と2012年の夏に「やしの実不思議塾」というワークショップを開講して中学生・高校生に田原にちなんだ怪談を書いてもらい2冊の冊子にまとめました。

「ふしぎ図書館」の開設にあたっては、翻訳家の金原瑞人氏と、編集者・アンソロジストの東雅夫氏という、幻想文学に深い造詣をお持ちの二人の目利きに200タイトルの幻想文学書をご推薦いただきました。また、泉鏡花研究の第一人者、田中勵儀氏には、泉鏡花とその世界への入門にふさわしい76タイトルの本をリストアップしていただきました。これらの本については、先にご寄付いただいたものは別に、新たに当館で収集しております。その品揃えは、今も成長を続けております。

「ふしぎ図書館」の開設をきっかけに、田原市図書館では、幻想文学の楽しみと、数々の不思議に彩られた渥美半島の魅力を発信するために「ふしぎ文学半島プロジ

エクト」をはじめました。鏡花・名月会、ふるさと怪談トークライブ in 名古屋実行委員会などのご協力をいただき、2012年から2013年にかけて、金原氏、東氏をはじめ多彩なゲストをお招きしてイベントも実施しております。これからも、田原市図書館は不思議を愛してやまない方々のための「ふしぎ発信基地」としての役割を果たしてまいります。



田原市中央図書館

田原市田原町

【田原市巡回ぐるりんバス「図書館」下車すぐ 三河田原駅より徒歩15分】

ふしぎ文学マスターから

金原瑞人

「お散歩 e 本プロジェクト」の第2弾、「ふしぎ編」を製作中？ またやるんですか？ というか、まだまだやるんですか？ 好きだなあ。

ついこないだも、西崎憲のアンソロジー『怪奇小説日和 黄金時代傑作選』が出た。怪奇小説（ゴースト・ストーリー）の傑作・異色作が 18 編。巻末の解説も素晴らしい。すごいなあと思ったら、今度は高原英理のアンソロジー『リテラリーゴシック・イン・ジャパン 文学的ゴシック作品選』が出た。こちらは、白秋、鏡花から大槻ケンジ、藤野可織まで、詩、短歌、俳句、短編などの異色作がたくさん収録されている。両方とも、ちくま文庫から。



撮影・森崎健一

また、一方で、田辺青蛙の『あめだま』（青土社）などという、じつに痛くて、不気味で、物騒な怪談短編集が誕生。

まったく、みんな好きだなあ……と他人事のように書きながら、いittou 好きなのは自分かもしれない。

かねはら みずひと

1954 年岡山市生まれ。法政大学教授・翻訳家。児童書やヤングアダルトむけの作品のほか、一般書、ノンフィクションなど、翻訳書は 400 点以上。訳書に『豚の死ない日』『青空のむこう』『国がない男』『不思議を売る男』『バーティミアス』『パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々』『ジョン万次郎 海を渡ったサムライ魂』『さよならを待つふたりのために』など。エッセイに『翻訳家じゃなくてカレー屋になるはずだった』。その他、『雨月物語』『仮名手本忠臣蔵』など。

ふしぎ文学マスターから

夢の住む場所

東雅夫

泉名月という愛すべき名前に、もしくは柳田國男の愛すべき小品「遊海島記」に、なにがしかの思い入れがある読書家にとって、渥美半島と田原市という地名は、金波銀波の煌めきや潮の香の幻とともに、ある種の憧憬を抱かせてやまない。

かく申す私も、その一人だが、一昨年、縁あって同地を訪れて以来、憧憬の対象が、そこにもうひとつ、加わった。

田原市図書館である。



とりわけ、宏壮な吹き抜け構造の二階部分に、空中回廊さながら、どこまでも連なる書架は、一瞥した瞬間、文豪ボルヘス謂うところの「バベルの図書館」という言葉を、驚嘆の念とともに連想させられたほどであった。

その一隅には現在、泉名月と、柳田國男と、世にも不思議な文学の数々が架蔵され、心ある読者の訪れを待ちかまえている。

ようこそ、書物という夢の極まる場所へ——。

ひがし まさお

1958年、神奈川県横須賀市生まれ。アンソロジスト、文芸評論家、怪談専門誌「幽」編集長。早稲田大学文学部卒。

1982年に研究批評誌「幻想文学」を創刊、2003年の終刊まで編集長を務めた。近年は各種アンソロジーの企画編纂や、幻想文学・ホラーを中心とする批評、怪談研究などの分野で著述・講演活動を展開。2011年、『遠野物語と怪談の時代』で第64回日本推理作家協会賞を受賞。著書に『百物語の怪談史』（角川ソフィア文庫）『文学の極意は怪談である』（筑摩書房）ほか、編纂書に『日本幻想文学大全』（ちくま文庫）『おばけずき 鏡花怪異小品集』（平凡社ライブラリー）ほか多数、監修書に『怪談えほん』（岩崎書店）ほかがある。

〈コラム〉「豊橋妖怪」と「ふしぎ」

「豊橋妖怪」と対峙して、二年になる。「豊橋妖怪ハンコ展」「豊橋妖怪パン祭り」を経て、この度「豊橋妖怪百物語」という書籍を上梓した。

どちらかというと、これまで「目に見えないもの」とは縁遠く、何かを感じることもなければ好んで近づくこともなかった。

では、なぜ急に（というかいきなり）、地元の「妖怪」たちに呼び出され、彼らのPR大使をすることになったのか。まあ、それはまた別の機会に。

さて、「ふしぎ」である。豊橋妖怪と関わるようになってから、「ふしぎ」な出来事に数々遭遇するようになった。

古民家の事務所の二階で仕事をしていると屋根裏をパタパタと走り回る足音が聞こえたり（その場に居たスタッフ全員がしっかりと聞いている）、豊橋妖怪の発表をする日の朝に着の身着のままで家から締め出されたり（大切なプレゼン資料一式、携帯も財布も鍵もすべて家の中、不慮の事故や不注意ではない）、問い合わせが来ないと思っていたら豊橋妖怪のホームページの事務局電話番号が変わっていたり（誓ってミスや故意ではない）、挙げだしたら枚挙に暇がない。

最初は、「おかしいな」とか「誰々のせい」で済ませていた。「大抵はどこかにその原因や理由がある」と平素理屈を好んでいた自分が、次々と起こる説明のつかない事たちと向き合っていくためには、患者を変えるしかなかった。

突然、その瞬間はやってきた。

（あっ、ふしぎだな）

原因や理由を探すことを放棄したわけではない。純粋に理屈ではないところに理由があるかもしれない、と受け入れられるようになったのだ。

受け入れられさえすれば、意外と楽ちんで嬉しい。少しすると、そのモノ（者・物）や事たちに、続けてそっと語りかけるようになった。

（どうしてかしら？ ねえ、ひょっとしてそこに居るの）

（あまりにも不自然だけど、あなたがそう仕向けている？）

そう、「ふしぎ」は、見えぬモノや事たちとの『対話の入口』でもあったのである。

「ふしぎ」が生まれ、語り継がれる背景には、これまで地域で大切にされてきた信仰、生活、文化、風習などがある。ふしぎのあるところ、地域の人々の歴史あり（多分）。

みなさんも恐れずに、自分自身の「ふしぎ」の扉を開いてみてはいかがだろうか。求めよ、さらば与えられん。その扉を開いた瞬間、地域の「ふしぎ」がみんなの目の前に広がるに違いない。



ばったり堂

豊橋市中柴町119

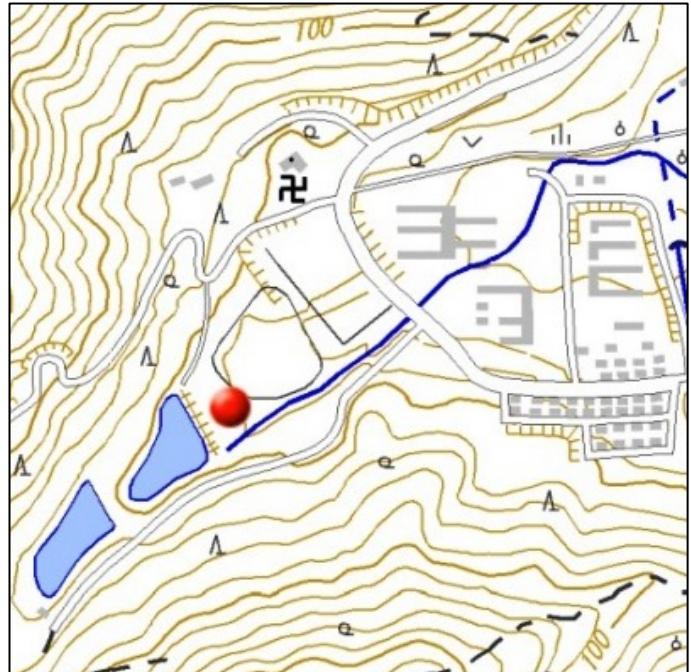
【豊橋駅より徒歩約12分】

ほいほいどり

親子の悲しい啼き声が、
今夜も藤七原に響き渡る。

藤七原部落に昔大勢子供のある未亡人が住んでいた。女手一人で、いくら働いても其日の食事にも困るという有様であった。ある日山へ薪をとりに行き、その側にあった他人の薪を一束もち帰って来た。悪いことでこれを知った部落の人達は冷たくあたった。ことによると告げ口をされて役人に捕えられるかもしれないと恐れ、思いあまた母親はかわいがっている一人の子を道連れにして、滝頭の池に投身自殺をした。このことがあってからしばらくたって、この池の付近を通った人が「ほういほうい」と呼びかけられた。他の人から呼びかけられたと思ったがそれは間違いで、自分の頭の上の木でみたこともない鳥が鳴いたのである。すると池の方から「ほういほうい」と答えるように、互いにものあわれに呼び合って鳴いた。これを誰いうとなく、親子が鳥に化生して呼び合うのだとわざして「ほいほい鳥」というようになった。





滝頭公園

田原市田原町西滝頭

【ぐるりんバス滝頭停留所下車】

すぐ、三河田原駅より車で約10分】

〈参考文献〉

- ・田原町史 下巻 田原町文化財保護審議会・田原町史編さん委員会編 1978 田原町・田原町教育委員会

〈コラム〉近いようで、遠い存在——鳥

この項目では「ほいほい鳥」を扱った。この、“鳥”にまつわる怪異は決して少なくない。今回紹介した物語は、「母子」が「鳥」になった話であったが、「母子」と「鳥」と聞いたときに、真っ先に「ウブメ（姑獲鳥／産女）」という単語が浮かぶ人もいるのではなかろうか。お産で無くなった女性の怨念が形になったモノとして描かれ、その名前や造形の幾つかに“鳥”としての属性が付与されている。

古事記や日本書紀、風土記といった所伝に現れる「八咫鳥」も、“鳥”だ。

太陽に住む三本足の鳥として、あるいは、サッカー日本代表の胸にも刻まれるエンブレムとして知っている人も多いだろう。「妖怪」という言葉を聞いたときに、多くの人が、（『鬼太郎ファミリー』を除いて）最初に鬼や河童と並んでイメージされるキャラクタの1つに天狗というものがある。鳥をモチーフにした天狗の意匠は多い。（“鳥天狗”と呼ばれるものも、その典型だろう。）

また、この「ほいほい鳥」のように、「鳴き声」にまで広げると、その範囲はさらに大きくなる。例えば、「鶲」。読者の中には、頭は猿、体は狸、尾は蛇、脚は虎といった、合成獣のような姿を想像する人もいるかもしれない。体の特徴だけみれば、「鳥」としての属性は皆無である。しかし、この「鶲」は、もともとは「夜に鳴く鳥」を指す言葉であった。「鶲」には「得体の知れないもの」という意味が付与されているが、もともとは「夜に鳴く、得体の知れない何か」という認識であったのだ。先に挙げた「合成獣」のバケモノも、実際には「鶲の声で鳴く得体の知れないもの」であり、「鶲」そのものでは無い。

「鶲」の声自体は、トラツグミの声ではないかと言われている。ほいほい鳥も、夜に「ホワイホワイ」と聞こえる鳴き方をする、藤七原周辺に生息する鳥として考えると、フクロウ科の鳥—おそらくアオバズクではないかと考えられる。

しかし、これもあくまで、条件から推測されるものであって、「ほいほい鳥」の正体を断定し得るものではない。

我々にとって、“鳥”は得体の知れないものであるというイメージが強い。触ると温かいが、空を飛ぶ。子ではなく、卵を生み育てる。哺乳類ほど近くもなければ、爬虫類・両生類ほども遠くない。夜、どこからともなく聞こえてくる心寂しい声に、人はさまざま思いを想起し、それが見据える深遠な眼差しに、我々は人の闇を見たのかもしれない。

<ティーンズ怪談学校> 父の昔物語

土肥壮太（田原市在住 高校2年生）

「俺がまだ、こーんくらい一ちゃかった頃の話だ」

と、父が僕の目の高さまで手を持ってきて言った。

僕は、福江町に住んでいて、この体験談は、小学生の頃に聞いた話である。

父は、続けた。

「山田の山に、友達3人とカブトムシを捕りに行ったんだ。夢中になって、時間も忘れてなあ。気がついたら空は夕暮れ色に染まっていて、場所もどこだかわからなくて、適当に歩くことにしたんだ。しばらく歩いていると、草木が切られ、整えられた道みたいなところに出てな」

と言うと、父は、酒をひとくち呑み、ノドを潤す。

僕は、話の続きを気になって、

「それで？」

と、父を急かした。

うん、それでな、と、父は、また語りはじめる。

「そこに出るとな、友達が疲れた、と言って座り込んじましたから、俺たちは、休むことにした。しばらくすると、なにか音がした。訊くと、みんなも聞こえるって。耳のよい友達が、歌だ、こっちから聞こえる、と言ってその方向に歩いて行ったんで、俺と、もうひとりも気になって、ついて行った。進むにつれて、歌はだんだんハッキリと聞こえてきて、歌っている人の姿が見えてもいいところまで近づいたんだが。そこに人はいなかったんだ。代わりに、そこには、ちいさな墓があった。一瞬、時間が止まった感じがして、頭の中は、真っ白だった、歌は聞こえてたのに、人はいないんだもんな。気味悪く思って逃げて、知っている場所に出て、なんとか帰ってこれたんだ」

と。

語り終えると、父は、満足そうな笑顔で、

「ウソだ、と思うなら、その時のふたりを呼んできてやるから訊いてみろ、おなじこと言うぞ」

と言った。

中学一年の夏、僕は、友達3人にこのことを語り、僕達4人で山田の山へと足を運ぶことにした。

首なし地蔵さま

仲睦まじく並ぶ二体のお地蔵さま。
ただ、この二体には首が無かった…。

「首のないお地蔵さま？ そんなのあるもんか。」

「ほんとにあるんだよ。」「どこに。」

「北番場のれいがん寺によ。」

おばあさんに、この話をきいた友二たちは、大勢で見に行きました。

「なあーんだ。首あるよ。」

二人ならんだ小さな石のお地蔵さまに、首はちゃんとついていました。みんなはほつと一安心。

「でもこの首へんだよ。なんだんにもごつごつしたセメントのあとがあるよ。」

「うん、こや後からつけただな。」

「そうだ。また落ちるんだって…。」

どうして、…どうしてでしょうか。

むかーし昔。田原の殿様の弟で、三宅貞三郎という方は、少し乱暴が過ぎたので、父の友信公からよく叱られたり、室にとじこめられたりしました。

「若さま、もうなさいませんよね。さ、きょう作りましたおはぎ、召し上がりませ。あさが持ってきたことは、ないしょでございますよ。」

侍女のおあさは十九才、しんそく貞三郎に親切でした。

「わかった。あさのいうことなら、こんどこそ、悪さはしないから。」

二人の仲のよいことがひろまると、

「けしからんぞ。」

「風紀をみだす、不届者たちめが。」と二人は叱られて、おあさは実家へ帰されてしまいました。

おあさがいなくなると、貞三郎はよけいおあさに会いたくて、夜、こっそり御殿をぬけだして、



おあさに会いに行きました。このことがみつかると、

「またまた、何という不謹慎なことを。」

「田原藩の士気が乱れているからだ。」

「見せしめのため、きびしい罰を。」

お城の上役の人たちが話し合って、貞三郎は切腹、おあさも自害をいいわたされました。貞三郎はさすが武士、りっぱに切腹されました。おあさは、

「私のおなかには、貞三郎のお子がいます。どうかこのお子を産ませてくださいませ。その上で自害を…。」

とたのみましたが聞きいれられず、おあさのおじが、涙ながらに、

「あわれやおあさ、このわしを鬼と思へや。」

と叫んで、首をはねてしまいました。

二人は三宅家の墓地に葬られましたが、あまりに可哀想にと、誰かがこのお地蔵さまを二人ならべてたてたとのこと。でもいつのまにか首が落ちてしまうのだそうです。今は誰かがつけてくださり、首はちゃんとついています。

靈巖寺

田原市田原町北番場

【三河田原駅より車で約5分

徒歩で11分】



〈引用文献〉

・「もと」ばあちゃんのおはなし 子どもたちへ伝える田原の民話・童話・伝記集

山田もと 2005 田原市教育委員会

〈コラム〉三宅家の人々

三宅家は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍したとされる児島高徳を祖としていますが、よくわかつていません。確実な資料では室町時代の後半に三河・加茂郡高橋荘（現在の豊田市）の地頭・中条氏の代官として現れます。その後独立勢力となったものの、16世紀半ばには徳川家康）に服属しました。以来、代々の三宅家の当主は家康から拝領した「康」の字を名前に含むようになりました。

田原藩は、関ヶ原の戦い後、伊豆下田より戸田氏が禄高1万石で移封され、三代治めますが、寛文四年（1664）以来12代206年間は三宅氏が藩主となりました。

「大力お姫様」に登場する「康雄公のお姫様」は、『三宅氏系譜』（『田原町史中巻』所収。幕末の田原藩士・市川茂右衛門編）によれば、康雄の娘は、於万のみが出ていますが、早世したことになっています。

「首なし地蔵さま」には貞三郎が登場します。天保6年（1835）に藩の隠居格・三宅友信の子として生まれ、事件の時には数えで30歳でした。時の藩主は貞三郎の兄・康保で、貞三郎はいわゆる冷飯食いの部屋住みの立場で領国・田原に住んでいました。

さて、田原市博物館には『田原藩日記』と総称される田原藩の日誌資料が保管されています。そのうちの『文久四年 御用方日記』には事件の前後の記録が残っています。事実がぼかされている感はぬぐえませんが、それでも思わぬ生々しさを持っているため、ここに要約します。

元治元年（1864）11月29日

夜明け前に貞三郎が御殿を勝手に飛び出して、一人で吉田（豊橋）に行ったとの話を重臣たちが聞きつけた。重臣たちは内々で相談し、「吉田にいる「彼婦人（原文の表現）」に会いにいったのだろう」と推察し、藩士2名を派遣した。



このことは父・友信の内々に知るところとなった。友信は激怒し、鍵付きの座敷牢に貞三郎を閉じ込めようと言い出した。重臣たちはとりなし、まずは江戸にいる藩主・康保に報告して沙汰を待つことにした。

同 11月 30日

夜明け前に貞三郎が帰ってきた。重臣らは貞三郎に「あなたのはなさったことは慎みを欠き、お父上も激怒なさっています。まずはお城すぐ近くの矢部沢のお屋敷に入り、お殿様（康保）の沙汰をお待ちください」と告げた。清掃の後、夕方ころに貞三郎は矢部沢屋敷に入った。この際、「心得違」いが起きるといけないので刀を貞三郎から取り上げ、部屋にも刃物を置かないようにした。

同 12月 1日

昼前、貞三郎が筆頭家老の村上財右衛門を呼び出して「父上のお怒りによってこうして謹慎することとなり、まことに恐れ入ることである。このうえはせめて切腹させてほしい」と言った。村上は「その儀、決してご無用。さような心得違いは不孝に不孝を重ねるものです。それよりは、改心して時節を待つようにしてください」と答えた。貞三郎は納得したようだった。

午後 6 時ころ、矢部沢屋敷から城に近習が駆けつけて言うには、貞三郎が「卒厥」の症状で痛みに苦しんでいるとのことだった。直ちに医師を派遣、さらに重臣らも赴いて貞三郎の症状を確認したところ、もはや危篤だった。そこで、友信に臨終の前に貞三郎に会ってはと伝えたが、拒否された。村上が「ではせめて、父上のお怒りだけは解けたと伝えさせてください」と求めると、友信はこれを承知した。貞三郎に伝えたところ、程なく再び痛み苦しみ始め、午後 10 時ころに死去した。こうした内容を友信に「^{そのままで}其儘」伝えた。また、江戸の藩邸に早飛脚を送った。



< コラム > 山田もとの残したもの

今回の、「首なし地蔵さま」そして、後ほど登場する「怪力お姫様」のお話。これらは、渥美郡田原町（現 田原市）出身の作家、山田もと（1920～2004）が記録した作品である。郷土を愛した彼女が、なぜ作品を残すことに情熱を傾けたのか、彼女の残した文章で振り返ってみたい。

四半世紀なぜ書きつづけたか

山田もと

書く、文章を書く、それも児童文学作品を書くということは、私にとって、いったいなんだったのでしよう。

今回、この特集を組むにあたり、『なぜ書きつづけてきたのか』と問われて、虚をつかれた感慨一入で、改めて『書く』ということを考えてみました。

「ただ書きたいので書いてきた。」

としかいいようがないのですが。書くことが楽しいからだけでもなく、むしろ苦しいことが多かったのに。

生活の糧にはなりようもないけれど、趣味といって片付けられるほど、安易なものでもなかったです。一口にいえば、心の生活の食物だったといいましょうか。

人間はだれでも、自分を表現しようとする心を持っています。意識するとしないとにかかわらず。

或る人は絵を描いて、或る人は歌を歌って、また踊りを踊って、料理を作ってと。

どんな小さいことでも、それなりに自分というものをそれにもりこんで、表現しようとします。

その表現に喜びを感じた時が、求めようとしていた、なにかの発見ではないでしょうか。たまたま、それを他の人にみとめられたりすると、ときには一生を左右するものにめぐり合うことだってあると思います。

私は歌も歌えない。絵も描けない。何もできないので、机の前でひっそりと、ひとりで原稿用紙をうずめるしかありません。それがたまたま児童文学だったということで、私の自己表現だと思います。

（中略）

“子供に読んでもらおう”
と、目的を持って書き出したのは、自分の子どもが幼児になってからです。

買ってやりたくても、お金も本もない時期とて、昔、読んだり聞いたりした話や、自作の思いつきを、縫い物などしながら、話してやっているうちに、子どもは字が読めるようになってきましたので、

「これ、読んでごらん。」

古いノートへ書き出したのが、はじまりです。

(中略)

誰も読んでくれなくてもいいと言いたいけれど、本心は、やっぱり誰かに読んでもらいたいです。できれば大勢の人々に……。そして、一人でも共感を得ることができたならば、こんな嬉しいことはありません。

『中部児童文学』第43号(1981年3月) 拠粹

彼女の足跡を辿る道標ともいいくべき、「記念碑」が、田原市滝頭一先きの「ほいほい鳥」の舞台である藤七原にある。

彼女の功績を讃え、2005年に建てられたもので、「愛・夢・感謝」の字が刻まれている。彼女の残した思いは、今も作品と共に生き続けている。



久丸王と小塩津の寝まつり

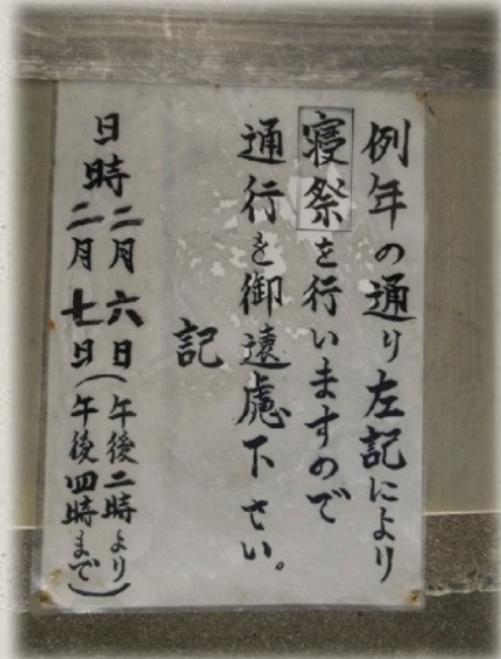
決して見てはならない、不思議な祭り。

人々が見てはならなかった“モノ”とは、いったい何だったのか。

吉野朝（今から約六百年前）の頃久丸王と呼ばれる高貴な方が戦にやぶれ、東に西に船で逃げるうちどういうわけか渥美町小塩津の小磯の浜に漂着してしまいました。

このことを知った純朴な村人たちは、おそれ、かしこみ、さっそく王を救け、ひとまず正福寺に移してかくまうことにしました。しかも世間をはばかる身のこととうていて永住することはできず、まもなく江比間に移り、更にまた神戸におもむきここで余生を送ったといわれています。小塩津日吉神社で行われた「ねまつり」はこのように他人に見られることをきらった久丸王の祭りであるため、当日、人々は家に籠り静かにしていたということです。

ねまつりは、毎年十二月二十五日より神官が神社に参籠することからはじまりますが、正月二月早朝、神社前より浜に続く神道（かんみち）を通り、海中にはいつて、水垢離をとり、祈祷を行います。人々はこのときの神官に会うことをいみきらい、神道より東の者は「西をむくな」「馬もなかすな」と、また神道より西の者は「東をむくな」「馬もなかすな」と門戸を閉じ慎んで神事の終るのをまったということです。しかしこの由緒ある祭りも維新とともに終り。今はわずかの古老により語り伝えられているにすぎません。一説にこの王は、護良親王であるともいわれていますがはっきりとはわかりません。また、正福寺は、この時王の入られた寺ということから、その山号を「入王山」と称するようになったのだと伝えられています。尚田原町神戸地区では今もこのねまつりの神事が行なわれており、天下の奇祭の一つに数えられています。



(広報あつみより)



日吉神社
田原市塩津町宮溝
【三河田原駅より車で
約35分】

〈引用文献〉

- ・渥美町の伝説 渥美町文化財保護審議会編 1993 渥美町教育委員会



<ティーンズ怪談学校> みちゃだめ

伊藤（田原市在住 高校2年生）

「寝祭り（＊）っていうのはさ、お家でやるもんなんだよ」

まあ、それが、お祭事というか、ただ家で寝るだけの行事なんだけど、と、加子が得意げに話した。

「そんなもん行事にならん」

と、利奈が言い返した。利奈は、腹を立てているようであった。

「だいたい、なんでお祭りなのに、おとなしく家に閉じこもっておねんねなんか…」

「久丸様を見たら、目、なくなるよ」

「は？」

意味がわからない、というように、利奈が返した。

すると、加子のやわらかい声が、

「久丸様っていうのは、神様のお祭りでね、家から出たり、窓を開けたりして外を見ると、久丸様を見ることになるんだ。それで、久丸様の姿を見た人は、久丸様に目をつぶされちゃうんだ」

引っ越してきたばかりの利奈には初めての寝祭りになるね。

と、続けた。

「久丸様って恥ずかしがり屋？」

「まさか！ 久丸様はね、ここに来たとき、酷いお顔と体になってたの。そんな自分を見られるのが嫌だから、目をつぶしちゃうの」

「そっか」

それから2週間程が過ぎ、祭りの日となった。

家は、窓も雨戸も全て閉めきり、家の中から外の様子をうかがえるものは全て遮断された。

こうなってはなにもやることがない。ただ、つまらないだけの時間が過ぎていき、寝るにもなんだか眠れなくなってしまった。

利奈はトイレに行こうと二階の自室を出て、一階へと降りた。

その際、玄関の扉が目についた。

玄関にはさすがに雨戸はついておらず、にごりガラスのせいではわけではあるが、かすかに外の様子がうかがえた。

ふと、加子との会話を思い出した。

利奈は好奇心で、玄関の扉をそっと開けて、外をのぞいた。

外は、雨が降っているだけで、利奈は、

「久丸様なんていないじゃん」

と、心の中で悪態をつき、扉を閉めようとした。

だが、何かがそれを阻んだ。

青白いような爛れた手が、扉と利奈を掴んだ。

と、同時に引き寄せられ、玄関から外に引きずり出された。

しゃがみこんだ視線の中には、爛れた足があった。おそらく顔をあげることができなかった。

頭上から、すうっと息を吸う音が聞こえ、野太い声で、

「見たな」
と聞こえた。

そして、
「あれだけ見ちゃだめって言ったのに」
という声におもわず、顔を上げた。
加子の声だった。

しかし、相手の顔が暗くて見えない。声をあげようにもあげられず、目をきつく
つむった。

ゆっくりと再び目を開くと、あたりはあかるく、布団にくるまっている状態。
夢だ、と悟った。

しかし、加子のあの声はなんだったんだろうか。そう思い、手元のケータイに目
をやると、メールが一件、入っていた。

「こんばんは」

目は平気？ つぶれてない？

私、見ちゃだめって言ったよね。

深夜、加子からのメールであった。



* 「久丸様」を祀る祭礼。毎年2月上旬、田原市神戸地区の久丸神社と神明社の間で渡御の神事が行わ
れる。その渡御の行列を見た者は、厄災に見舞われるとされ、渡御の時刻になると里人は家にこもり、
雨戸を閉める。その様子から「寝祭り」と呼び慣わされてきたのだという。(東三河広域協議会発刊「は
の国通信14」等をもとに選者注釈)

大力お姫様

見た目はごく普通のお姫様でした。

でも、ただひとつ違っていたのは、姫様は怪力だったのです。

田原城主になられた、三宅の殿様のごせんぞは、代々大力で有名でした。中でも三代康盛公は、特に力が強かったと伝えられています。

この大力は女子に伝われば、そこで終わりになるといわれていました。一代おいて五代康雄公の姫に伝わりました。

この姫は体も大きく、気性も男まさりで、なみなみならぬ力持ちでした。母はいつも心配して、「どんなことがあっても、あなたの力を外にだしてはなりません。」と、いいきかせていました。でも姫にはそれが不満でなりません。

或る時、城中で家来たちが、武具の入った大きな箱を、動かすのに困っていたので、つい手をだして、かるがる持ち上げて、はこんでやりました。

「まっ、姫様、もったいない。だがどうしてこんな重い箱を。」

家来たちはびっくり。城中にこのうわさがひろがりだしたので、母はこんなうわさがひろがれば、お嫁にもゆけなくなると、ますます心配です。

「姫、いつもいいきかせているではありませんか。そなたの大力、使ってはなりませんと。」

「でも家来達が困っていましたから。」

「いくら困っていても、手出しありませぬ。」

「ほんのちょっと、箱を動かしただけです。」

「それがいけません。」

姫には、母のいうことがわかりません。なぜ、ちょっと重い物を持ち上げたくらいで、こんなにしかられるのか。くやしくて、くやしくて、そばの火鉢にさしてあった鉄の火ばしを、両手にもって、なきながらさすっているうちに、つい力が入って、その火ばしを、縄のようによってしまいました。



「そらおそろしき娘よな。」

母は青くなつたといわれています。

またのとき、侍女なのにやらの過失をおこつて、その髪を引っぱつて、庭まで引きずつていきました。

「どうかお許しください。」

泣き叫ぶ長い髪の毛を、庭においてあつた、石の手洗い鉢をひょいと持ち上げて、
「今後のいましめにせよ。」

と髪の上におろして、下じきにしてしまいました。その手洗い鉢は、八百貫（約三トン）
もある大きなものでした。

この手洗い鉢は、今も巴江神社の境内にあります。いい伝えどおり、この大力はこの姫
の後には表れませんでした。



巴江神社

田原市田原町巴江

【三河田原駅より車で
約15分、徒歩で約20分】



〈引用文献〉

- ・「もと」ばあちゃんのおはなし 子どもたちへ伝える田原の民話・童話・伝記集
山田もと 2005 田原市教育委員会

〈コラム〉田原城と巴江神社

田原城は渥美半島の中ほど、三河湾から大きく食い込んだ入江に沿った小さな丘に築城されました。築城は戦国時代初期の文明12年（1480）ころ、築城者は当時渥美半島と三河湾の海上支配を目指した戸田宗光（？～1500ころ）です。「えっ、田原城が海沿いっておかしいんじゃないの？」と思ったあなたは田原のことを結構ご存知ですね。現在の田原の町なかはそのほとんどが元は海の中で、江戸時代の干拓によって陸地に変わったものです。

さて、田原を含めた三河国は今川氏・織田氏・武田氏・徳川氏、そしてその中でひしめく小勢力の間で盛んに合戦が繰り広げられました。田原城もその例にもれず、少なくとも2度本格的な戦争を経験しています。1度目は天文17年（1546）、駿河の戦国大名・今川義元によって攻撃を受けて落城、当時の戸田氏の当主親子を含めて多くが戦死したといわれています。2度目は三河・岡崎の徳川家康が攻めてきました。攻防戦の結果、城は開城し、今川家の城代は退去しています。

こうした攻防戦を示すものとして、田原城本丸北側にあった藤田曲輪の発掘調査では、激しく燃えた痕跡が発見されました。1度目の合戦では、多くの戦死者の血で近くの池が赤く染まったという伝承も残っています。ただ、その割には怪談めいた話があまりないようにも思いますが、気のせいでしょうか。ちなみに、私は田原市博物館に務めていますが、夜遅くまで残業をしていても幽霊を見たことは今のところありません。

なお、最近では愛知大学の山田邦明先生のように1度目の田原城を巡る戦いはそこまでの規模でなく、落城には至っていないと考える研究者もいることも書き添えておきます。

さて、時代は下り、江戸時代前半には田原城は三宅氏の支配となっていました。三宅氏は三河国加茂郡の土豪出身ですが、南北朝時代に後醍醐天皇に中世を尽くした児島高徳（14世紀前半頃）を祖先としています。この児島高徳と、戦国時代に家康について活躍して大名の地位を得た三宅康貞（1544-1615）を祭神としたおやしろが田原城の二ノ丸にあったのを、昭和になってから旧士族が本丸に移動して立派な神社にしたのが巴江神社です。現在は巴江地区の氏子とする神社として、毎年9月中旬の田原のお祭りの舞台となっています。

およしほうこん

恋に敗れた乙女の亡靈が、
人魂となって彷徨い続ける。

その昔およしという娘がいた。およしには一緒にになると誓った男性がいた。しかし親の反対ではかない夢は消え果ててしまった。しかし、およしは男性を忘れることができず、二人で死のうと思い、およしはたもとに石をしばりつけて身を投げて死んだ。それを見て男性は死ぬことができず、姿を消した。

それから数日後、村の人が夜網を引いていると、青白い光が現われた。人々はこわくなって必死になって家に帰った。その後もまた火の玉が現われ、村人を驚かせた。そこでみんなはおよしの亡靈が恋人だった男性をさがして、さまよっているのだと思い、およしの身を投げた所へ墓を建ててやった。その後もいろいろなことがあったが、およしの供養をねんごろにしたところ、ぼうこんはでなくなつたということである。

田原市江比間町

(※詳しい場所は不明)

【三河田原駅より車で約25分】



〈引用文献〉

・渥美町史 考古・民俗編 渥美町町史編さん委員会編 1991 渥美町

<ティーンズ怪談学校> 狐の提灯

小鳥遊鷹師（田原市在住 高校1年生）

この話は、僕が福江小学校の生徒で6年生だったときのことだ。

夏休みに入り、卒業も近づいていた。今日は、全校出校日で、みんな学校に集まっていた。

「おー！ みんな久しぶり！」

同じ部活のSくんが教室に入ってきた。

「おお、Sくん久しぶり」

部活があったときは、毎日のように会っていたが、部活がなくなってしまったので、会うのは久しぶりだった。

「ねえ、Kくんはどうしたの？」

Kくんも同じ部活で、SくんとKくんと僕は、よく遊ぶ仲だった。

「まだ来てないみたいだよ」

「そうなのか・・・どうしたのかな・・・」

もうすぐ一時間目が始まってしまうというのに、Kくんは来なかった。

僕とSくんは、先生に、どうして彼が来ないのか訊いてみた。そうすると、「家人から電話がきていて、どうやら体調が悪いらしいよ。それから、今日、Kくんに渡すはずだったプリントを持って行ってほしいんだけど、いいかな？」と、言われた。

特に用事もなかっただけで、Kくんの家までプリントを持って行くことになった。

「はあ・・・あついなあ・・・」

学校を終えてKくんの家へSくんと歩いていた。Kくんの家は保美にあった。

「お邪魔します」

家に入ると、Kくんのお母さんがいた。お母さんは、僕たちを見ると、少し焦った顔で、こう言った。

「学校の先生から話は聞いたよ。プリント持ってきててくれて、ありがとうね」

僕とSくんは、Kくんのお母さんと少し話をして、Kくんに会いに行った。

Kくんは、とても疲れた顔をしていた。

「どっ・・・どうしたんだよ、そんな顔をして・・・」

Sくんが思わず訊いた。僕もおどろいていた。

「来てくれたのか！ プリントも持ってきててくれてありがとう」

風邪を引いているようで、声はがらがらだった。

「実は、昨日は、野田のいとこの家に行っていたんだ。・・・それで、夕方になって、いとこの友達と花火をやることになったんだ」

「それで、どうしたんだ？」

「提灯みたいなものを持っている人を見たんだよ。それで気になって見に行つたんだ」

「だれだったんだよ」

「だれだかはわからなかったんだ・・・。近づこうとすると、すぐに離れて行っちゃうんだ。追いかけても、追いかけてもだめだった」

「他のいとこたちは、どうしたんだよ」

「走ってる途中に見失っちゃったんだ。それで、迷子になっちゃって・・・」

いとこたちがいなくなつたことに気づいて追いかけるのをやめたらしい。みんなを探しているときに川を泳いだせいで、風邪を引いてしまつたという。

いとこのおばあちゃんは、

「大明神の狐が昔、このあたりにいたらしい。近頃は見た人がいないから、めずらしい体験をしたのう」

と、言っていたそうだ。

「風邪引いただけでよかったですけど、もう二度と提灯は追いかけないよ」

KくんとSくんと僕は、笑いながら、一緒にプリントをやりはじめた。



泉名月居所跡

幻想文学の巨人 泉鏡花と、泉家の養子 泉名月。
名月が過ごした場所から見た海、その先には。

いざみなつき
泉名月

昭和 8 年（1933 年）9 月 21 日

現在の田原市田原町池の原に生まれる

昭和 44 年（1969 年）

田原を舞台にした作品を含む童話集『鬼ゆり』

刊行

昭和 57 年（1982 年）

泉鏡花にまつわる回想記『羽つき・手がら・鼓
の緒』刊行

平成 11 年（1999 年） 泉鏡花記念館名誉館長就任

平成 20 年（2008 年）7 月 6 日 逝去



泉名月と泉鏡花

泉名月が生まれ育った田原を離れたのは、鏡花を亡くしたすぐ夫人に乞われ、東京麹町の泉家に入った 10 歳の頃。自作『うたちゃん』の中で「田原の中部国民学校」四年、と回想しています。

名月の作品に描かれる田原は、その頃の記憶とともに創造された世界だと言えるでしょう。現代から見ると少しのんびりした、牧歌的ともいえる色彩鮮やかな幻の田原に読む者を誘います。そして、衣笠山の自然や姫島への思いなど、田原の風景や人々に名月がいかに影響を受けたか、感じさせてくれます。

一方、鏡花が母を亡くしたのが数え年で 10 歳の頃。



鏡花の亡母への憧憬は深く、その作品へ
色濃く影を落としています。

また鏡花も若くして小説家を志し、生地金沢を発って上京しています。東京で小説家として成功をおさめつつも故郷を忘れるることはなかったのでしょうか。金沢を舞台にした作品を数多く残しています。



こう見えていくと、名月と鏡花はふたりとも「10歳の頃に人生を変えるような出来事を体験し、そこで失ったものを追い求め、故郷を愛し、それを作り昇華させた作家」ということができるのかもしれません。

伯父と姪の間柄とはいえ、名月は鏡花と会うことはありませんでした。しかし自分を身籠った母が鏡花に会っていることをこんなふうに書いています。

「私は母と一身同体の時でしたから、母の脈うつ壁を通して、鏡花の気配やその時のようにすを感じとっていたかもしれません」

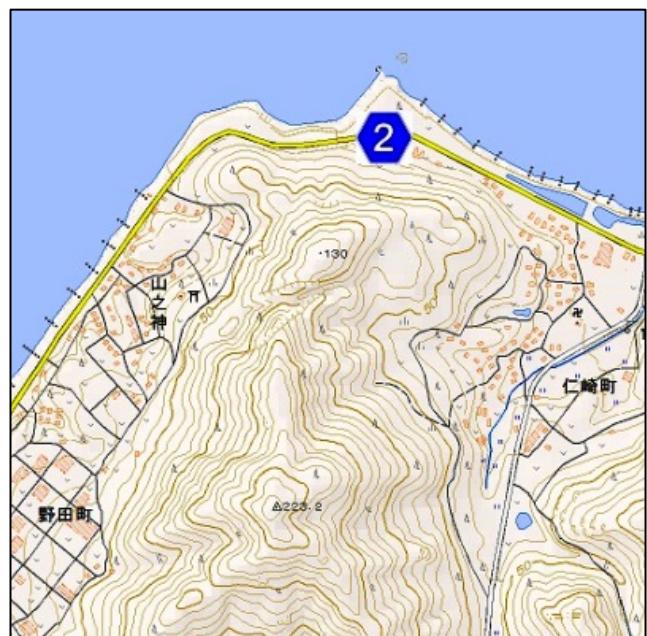
会ったことのない鏡花について鏡花の文章を思わせる繊細な言葉で書くことを可能にしたのは、名月の鏡花に対する敬慕か、探求心か、それとも作家中井英夫が言うように「紛れもない血縁の存在、それもありな血の濃さ」だったのでしょうか。
「ふしぎ」は尽きません。

泉名月居所跡

田原市仁崎町黒石

(※詳しい場所は不明)

【三河田原駅より車で約20分】



<ティーンズ怪談学校> 傷の話

稻垣（田原市在住 高校2年生）

日差しが強く照りつけるある日のことだった。

ひとりの編入生がやってきたのだ。

わたなべはな
「渡辺華です」

ひかえめだが芯の通った声は、一学期末というなんともおかしな時期の編入生そのものを表しているように思えた。

高校での編入生とは珍しいもので、周囲は彼女をしきりに噂していた。

前の学校で事件を起こしたとか、不登校だったとか。

結局、話してみると、案外ふつうであった渡辺さんは、いわゆる転勤族で、この学校へも、父親の仕事が理由で通うことになったようだった。

渡辺さんが編入ってきて三日目、その日の帰りのことだった。

季節柄、まだ日は落ちそうにない。

雲が浮かぶ空の下、数人の男子がボールを投げ合いながら還るのが見えた。

この時間にこんなところにいるのだから、大方、どこかの文化部なのだろうと見当をつけて、さあわたしも家に帰ろう、そう思った時だった。

ひとりの男子が投げたボールが、一本の木の上に引っかかった。

あまり関係はないのだが、わたしの学校は、^{わたなべかざん} 渡辺翠山とゆかりがあり、学校前に銅像が建っている。

その像の上に、男子生徒が引っかけたボールがあるのだ。

像によじ登れば取れそうだったが、そういうわけにもいかないらしく、最終的には、引っかかった木の根元を蹴り、揺らして取る、という方法に至ったようだった。

順調にボールは落ちたのだが、一緒に落下してきた木の枝が像の顔に引っかかって、白く線が入って、傷ついたように見えた。

次の日、登校してみると、渡辺さんは、顔にガーゼを貼っている。

驚いて理由を訊くと、虫にびっくりしてよろけたら、道端の木で擦ってしまったというのだ。

顔は女子の命なのだから大事にしなくては、という旨を伝えつつ、大事がなくてよかったね、と労いの言葉をかけた。

渡辺さんは、ところどころ抜けている性格らしく、昨日ケガをしたというのに、また転び、手首あたりに擦り傷を作っていた。

帰り道、像をふと見ると、昨日の傷ともうひとつ、組んでいる手に傷がついていた。

時期外れの編入生が来て5日目。登校しても渡辺さんの机はなく、本人の姿もなかった。

何事かと思い、クラスメートに彼女の所在を訊いたのだが、みんな、口をそろえて、こう言った。

「渡辺さん？ そんな子、いたっけ」

なぜだか知らないが、どうやらみんなから彼女の記憶が抜け落ちているらしい。

これは、どうしたことか、と頭を抱えていたら、ひとりの友人がやってきて、わたしにこう言った。

「ねえ、さっきあんたが言ってた渡辺さんって子だけど、やっぱりそんな子いないよ。先生にも訊いたけど、そもそも編入生なんて来てないって」

この子は、なにを言っているのだろう。

編入生？ ねえ、聞いてる？ という彼女に向かって、わたしは、ひとこと呟いた。

「渡辺さんって、誰？」

校前の像は、今でも変わらず、凛とした態度で佇んでいる。



池ノ原公園

華山先生も「ふしき」がお好き？

渡辺華山が記した怪火とは一体。

渡辺華山 [寛政5年(1793)～天保12年(1841)]

華山は江戸麹町田原藩上屋敷に生まれた。絵は金子金陵から谷文晁につき、人物・山水画では、西洋的な陰影・遠近画法を用い、日本絵画史にも大きな影響を与えた。天保3年、40歳で藩の江戸家老となり、困窮する藩財政の立て直しに努めながら、幕末の激動の中で内外情勢をよく研究し、江戸の蘭学研究の中心にいたが、「蛮社の獄」で高野長英らと共に投獄され、在所蟄居となった。画弟子たちが絵を売り、恩師の生計を救おうとしたが、藩内外の世評により、藩主に災いの及ぶことをおそれ、天保12年に田原池ノ原で自刃した。



華山の記した怪異～グヒンサマ～

田原を代表する人物として筆頭にあげられるのが、渡辺華山ではないだろうか。田原の民のために尽力し、天保の飢饉の際にも、誰一人として藩内に餓死する者を出さないようにした人物としても知られている。

この華山が、「怪火」の記録を残している。



御城下片町に善九郎といふ輿夫あり。ことし二月四日の事なりしが、吉田に使に
たのまれ、こゝかしこ用多くて思はず日暮たれバ、提燈をかりなどしてかえり
をいそぎけれど、夜いたく深けて、丑刻ばかりに、天津縄手にかゝれり。此縄手ハ
凡一里ばかりもありて、南は田畠、北は入海にて笠嶋、蔵王などいへる山々
打めぐり、其麓に浦村、波瀬村などいへる所あり。縄手よりハ海のわたり一里
あまりもあるべし。近頃こゝに沿ヒ、新田あまた開き、そのたゞ中を掘りて川
となし水を落す。潮満れバ人のたけを越え、ひける時も又乳に及ぶ。此善九郎
やゝ道の半ば過ぎし程、浦村のかたにひとつの燈見ゆ。此わたりあかしをおける

家ハあるまじ、或は漁の火ならんにハ、山にそひてあらんやうもなし。或ハ龍燈

三河の方言に龍燈というハ、夏秋の際、山海ヲ亘リ何ものとも審ならざる火燃る。其火形
さまざまにて或ハ千百群をなし、或ハ大火珠の状をなして叢林にかゝり、或ハ海中に浮ぶ。
走る時は疾電の如く、止る時ハ懸鏡の如く、或ハ人を送り、或ハ人を威す。海に浮び川に
出る時は、魚蠣必ずなく、人を驚す時ハ多くハ山伏の状をなすと云。此ものに逢ふもの、
草

履をいたゞきて其災いをさく

はグヒンサマのわざと聞く。時をさだめぬこともあるものとし、ひとり疑ひたゞはし
るに、其火俄に大きうなりて、入江を飛び渡るよと見しが、早後のかたに火然
出でゝ、其中より大なる男と覚へ、両脇より手をさし入、胸のあたりをひそめ
て、空に引揚げられたり。肝もうせてものの覚もなくなり、せんすべなし。やゝありて
人こゝちつきて目を開き見るに、数百の火球前後左右をかこミ、其身ハ
川のたゞ中にうち入れられ、胸のあたり水にひたされ、ひへこゞへ、息もつき
得ず、声もたゞず、溺れ死なんとす。まことにおそろしといふも、あまりあること
にて、又目を閉ぢ心に神佛を祈りつゝ、はふはふもとの縄手に這ひあがり、
今田橋といふ所の、ひとつ家にたどりつきて、藁を焚き身をあぶり
など介抱にあひ、かろうじていのちたすかりたり。龍燈にあへるものは、
龍燈の火を消し応ぜぬやうにすべし。此善九郎これをしらで、災にあ
ひたるなるべしと。このひとつ家のあるじなる金兵衛といふもの申たりと中
村氏の話なり。中村氏ハ善九郎が此後、やめる事あるを療治して、直に
打きゝたる事なれば、空言にハあらじ。おのれも善九郎をよびて、聞ん
とせしが、かゝる身の上なれば思ひとゞまりぬ。

龍燈を見たる人は多けれど、まさしく奇怪に逢ふはまれなり。八九年
前吉田の医師浅井完晃といふもの、御城下十町の平野屋庄右衛門が死し
とき、療治にまいり酒いたくたうべたれば、駕籠にのりて帰るき、また此縄
手にて龍燈に逢たり。酔たるまゝにをとにきく龍燈が神あらばこゝ
てせんかたなく。たちかへりたちと、鈴木氏の話なり。

「幽居記聞卷」

華山の記した「グヒンサマ」

は、「狗賓様（ごひんさま）」とも呼ばれ、田原だけでなく、隣接する豊橋でも残る、主に海上に現れる怪火の伝承である。海の周辺だけでなく、蔵王山の頂上からも目撃されたという記録がある。「主に」と但し書きを加えたのは、訳がある。海だけでなく、谷熊町にあったとされる松の大木、あるいは汐川にかかっていた一本橋付近にも出没したようである。（谷熊に出たものは、大きくなったり小さくなったりする火の玉として記録されている。）豊橋で語られる伝承では、燃えさかる中に恐ろしい顔が見えるというものもある。



華山が「龍燈」という三河の方言を出しているが、これは、神が魚を集めるために、龍に火を燃やさせたからだ、と伝わっている。そのため、グヒンサマ（狗賓様）が現れた夜は、大漁になるにもかかわらず、獲物は捨てて返らなければならないとされている。（持って帰ったとしても、泥になってしまう話も伝わる。）また、網を打っている船に止まり、船を動かなくさせることもある。

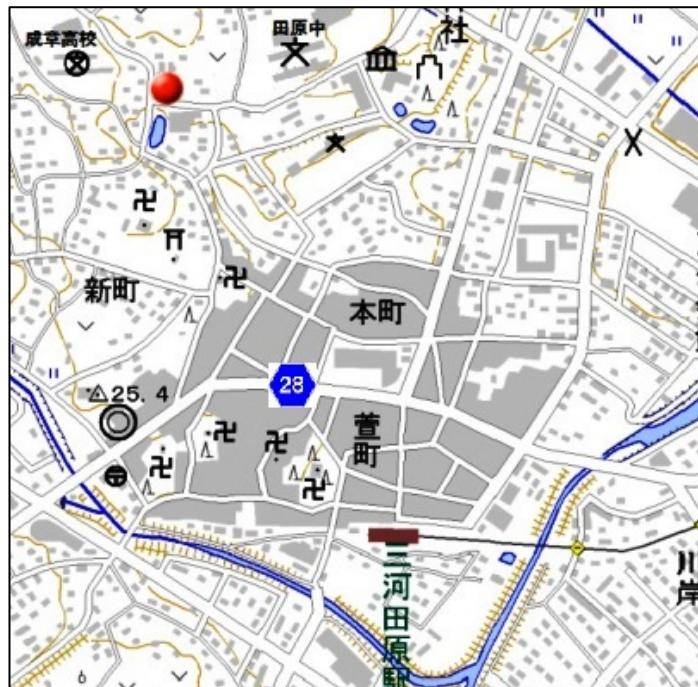
しかし、グヒンサマ（狗賓様）は、天狗とも鳥とも言われており（「天狗神」の天が略され、「神」が「賓」へと転じ、「狗賓」さまとなったと考えられている）、華山の「人を驚す時ハ多くハ山伏の状をなす」というのも、「龍燈」の説明として記載されてはいるものの、一般的な「天狗」のもつ山伏姿のイメージが重なる。（ちなみに、天狗と鳥も関わりが深い。これに関しては、「ほいほい鳥」参照。）

尚、愛知県において渥美半島の対をなす知多半島においても、海上に現れる怪火を「天狗の仕業」と認識していた記録が残されている。（例えば、南知多町では海上に現れる怪火を「磯天狗」と表現している記録がある。）そして面白いことに、知多半島においても、豊橋においても、この怪火の厄災を避けるまじないとして、華山が記すように「草履を頭に載せる」（草鞋である場合もある）ことが伝わっている。

華山が、この怪異を信じていたかどうかは、今となってはわからない。

しかし、彼の記した記録の中に記述が残されているということは、少なくとも関心はあったのではないかと考えられる。「ふしぎ」のもつ魅力は、有名無名関わらず、その心を引き寄せるものなのかもしれない。

華山は、画家としても有名であるが、その弟の渡辺如山も同じく画家であった。その如山の箱書をもつ絵巻「稻生怪談」が2012年、横浜市で発見された。「稻生物怪録」（広島県三次市に伝わる、備後三次藩士・稻生平太郎が体験した様々な怪異記録）に材をとったものであるが、本当に如山が描いたものであるかどうかの真偽のほどは、定かではない。しかし、兄弟揃ってそれぞれが内容こそ異なれ、怪異の記録に関連づけられているというのも、またひとつの「ふしぎ」な縁ではないだろうか。



池ノ原公園

田原市田原町中小路

【三河田原駅より車で約5分、徒歩約20分】

おわりに～「ふしき」の花を咲かせよう～

今回、この本の中でさまざまな「ふしき」を紹介しました。

恐ろしい「ふしき」、悲しい「ふしき」、楽しい「ふしき」…いろいろな「ふしき」がありました。いろいろな場面で、「ふしき」はひょっこりと顔を出します。「はじめに」で、大切なのは、「ふしき」か「ふしきじゃないか」ではなく、「ふしき」の“種”に気がつくことにあるという話をしました。

物事を「なぜだろう」「どうしてだろう」と立ち止まり、そこに思いを寄せ、考えるということは、これまでに知り得た知識、経験した事柄など、自分自身のもっている情報を再確認することに繋がります。「ふしき」の種を見つけることは、これまでの自分を振り返り、自分自身を知る種を見つけることでもあるのです。

また、「ふしき」の捉え方は、決してひとつではありません。

百人いれば、それだけの「ふしき」の受け取り方があります。今回、それぞれの内容に「コラム」を設け、「ふしき」を掘り下げました。文学として捉える「ふしき」もあるでしょう。「ふしき」に登場する人物や時代背景を、歴史の1ページとして見ることもできるかもしれません。「ふしき」を通じて、われわれの祖先が自然をどのように認識してきたのかを知る糸口が見つかることもあります。

「ふしき」の種はあくまで、「種」でしかありません。そこからどのような芽が出て、花が開くのかは、育て方次第なのです。

また、私達は「ふしき」をこのような電子書籍として残すことに、大きな意味があると考えています。大きな災害が起きたとき、人の営みは簡単に崩れ去ります。東日本大震災でも、生命、建物だけでなく、人の営みの結晶とも言うべき「文化」がたくさん失われました。例えば、地元に伝わる話の語り部。例えば、お祭りで用いた道具。例えば、古い言い伝えが残る場所。例えば、郷土のあゆみを記録した資料。一度失われしまった「文化」を戻すことは、容易なことではありません。二度と戻らないことも決して少なくないのです。

現在、東海・東南海・南海沖地震の発生が危惧されています。

田原も、大きな影響を受けることが予想されています。田原に伝わるさまざまな文化を、ひとつでも多く守りたい。記録として残したい。その願いがこの本には込められています。記録には様々な方法があります。文章化して書籍として残す方法

もあれば、写真や映像として記録する方法もあります。しかし、これらは、保存する建物の倒壊が倒壊したり、津波による浸水などの影響を受けたりして、損なわれてしまう可能性も十分にあります。このような損失を避けるため、記録をテキストと画像と映像を含む電子書籍として、インターネット上に残すということも、方法としてはあるのではないかと考えました。

もちろん、このメディアの進化速度は非常に速く、今の電子書籍の形式がそのまま維持される保証はありません。だからこそ、その進みにあわせ、アップデートしていくかなければなりません。従来の書籍であれば、こうした手間はほとんどかかりませんでした。しかし、こうした手間こそあるものの、記録を残し、広く知つてもらうことを目的とする上で、現在、極めて有効な方法であることに代わりはありません。

先ほど、「文化」を人の営みの結晶として記しました。

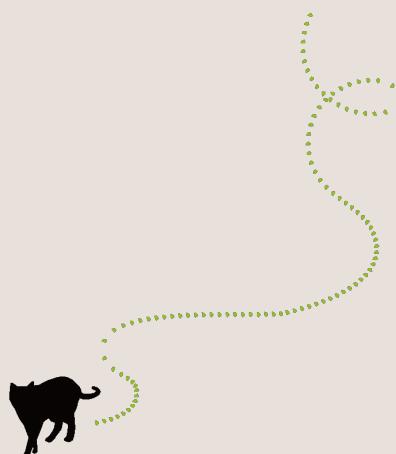
「ふしぎ」もまた、人の営みの1つの現れであると思います。

たかが「ふしぎ」、されど「ふしぎ」。

「ふしぎ」は、自分自身、ひいては、その集まりである社会を写す鏡でもあります。だからこそ、「ふしぎ」を電子書籍として残したかったのです。

「ふしぎ」の種は、自分自身の、あるいは自分たちの住んでいる地域を再発見させてくれる力を秘めています。

花のまち田原に、「ふしぎ」の花が咲き乱れる日がくることを、心から願っています。



お散歩 e 本 ふしぎ編 MAP



- | | |
|-------------------|----------------|
| ① 八人塚 | ⑨ ほいほい鳥（滝頭公園） |
| ② 鶲鶴石 | ⑩ 首なし地蔵（靈巖寺） |
| ③ 海で拾ったお地蔵さん（海蔵院） | ⑪ 寝まつり（日吉神社） |
| ④ お田戸さんの怪（田戸神社） | ⑫ 大力お姫様（巴江神社） |
| ⑤ 化粧地蔵（法光院） | ⑬ およしほうこん（江比間） |
| ⑥ 伊良湖神社 | ⑭ 泉名月居所跡（仁崎） |
| ⑦ 柳田國男逗留の地 | ⑮ 池ノ原公園 |
| ⑧ 田原市中央図書館 | |



この本は、2013年10月5日に、田原市内で開催された「お散歩e本」ワークショップの成果を基に、お散歩e本実行委員、田原市図書館職員が協力して作成したものです。コラム執筆にご協力いただいた方、ワークショップにご協力いただいた方を始めとする関係者の皆様に心から感謝申し上げます。また、『もとばあちゃんのおはなし』からの文章につき、クリエイティブ・コモンズでの公開をご了承いただいた山田良元様に感謝申し上げます。

● お散歩e本実行委員

時実象一（愛知大学）岡野裕行（皇學館大学）島田尚幸（東海中学・高等学校）内浦有美（株式会社うちうら）畔柳郁子（図書館フレンズ田原）豊田高広（田原市図書館）木村洋介（田原市博物館）

● e本製作・事務局

武村佳恵、辻一生、大谷恭代、大林正智、村上由美子（田原市図書館）

● 執筆協力

大羽康利、金原瑞人、川口務、東雅夫、田原市博物館

● ワークショップ参加・協力者

浅井結子、天野良枝、小澤美穂子、小柳津糸、河合節子、河合伸夫、鈴木利香、高崎楊子、浪崎真由美、平野利依、福井厚子、御於紗馬

● 表紙

小出ゆかり（creativeASURA）

● 発行

田原市図書館 〒441-3421 田原市田原町汐見5番地

<http://www.city.tahara.aichi.jp/section/library/index.html>

● 発行年月日

2014年3月5日

本文中の地図は、国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」で作成しました。

本書の文章と写真・地図はクリエイティブ・コモンズの「表示—継承」ライセンス（CC-BY-SA）によって公開されています。

原作者のクレジットを表示すれば、営利・非営利にかかわらず二次利用が許可されます。